

星城大学 研究シーズ集

- リハビリテーション学部
- 経営学部

2016 年 9 月

星城大学 地域センター

ごあいさつ

地域センターの理念

「地域にとけこみ、地域に貢献し、地域とともに発展する。」

地域センターは、星城大学の地域貢献活動を推進するため、2011年に設立されました。「地域にとけこみ、地域に貢献し、地域とともに発展する」という理念を掲げ、以下の行動指針に従って活動しています。

1. 星城大学を、地域とふれあい、地域にとけこむ、地域の構成員「大学市民」にします。
2. 星城大学を、地域貢献を通し、地域や人々、学生、教職員から喜ばれる大学にします。
3. 星城大学を、人々が立ち寄り、利用し、集う大学にします。
4. 地域と人々と大学とをつなぎ、協働を生み出します。
5. 新しい地域貢献のアイデアを生み出し実現します。
6. 星城大学を、愛知県でもっとも有名な地域貢献大学にします。

活動にあたって、一人でも多くの学生や教職員が地域との関わりを持てるように、星城大学の中に地域貢献しやすい環境を構築することを目指しています。センター設立以来、地域の方々とのつながりがいくつも芽生え、具体的な協働活動に繋がる機会が増えています。

さて、2009年度に初めて発刊された本学の研究シーズ集も改訂第12版となりました。

おかげさまで、本年度も既にいくつかの協働プロジェクトが始動しております。どうかこの冊子をご覧いただき、ご関心をお持ちになりましたら、ぜひ、お気軽にお問い合わせください。

私たちは、地域の皆様とのご縁を大切に、地域の皆様と一緒に活動できることを願っております。どうぞよろしくお願いいたします。

2016年9月吉日

星城大学 地域センター
センター長 石田 隆城

連絡先

星城大学 地域センター
〒476-8588 愛知県東海市富貴ノ台2-172
Tel : 052-601-6000 (代表)
e-mail : koryu@seijoh-u.ac.jp

目 次

■リハビリテーション学部

安倍基幸 教授	: リハビリテーション医学全般	2
江西一成 教授	: リハビリテーション医学、理学療法学	3
久保金弥 教授	: 脳神経科学、神経解剖学	4
坂井一也 教授	: 精神障害者地域生活支援、精神科作業療法、障害者スポーツ、就労支援	5
竹田徳則 教授	: 高齢者健康支援学、認知症予防、介護予防、社会疫学	6
Scott Petersen 教授	: 応用言語学、教材開発、翻訳論	7
古川公宣 教授	: 運動学、電気生理学、心身健康科学	8
森川孝典 教授	: 文化人類学	9
山田和政 教授	: 理学療法学、健康支援学	10
太田進 准教授	: 理学療法学	11
岸貴介 准教授	: 哲学、倫理学、宗教学	12
林久恵 准教授	: 理学療法学	13
藤田高史 准教授	: 日常生活活動学、健康支援学、高次脳機能障害治療学	14
飯塚照史 講師	: 整形外科(手外科)分野におけるリハビリテーション、装具療法学、作業療法学	15
大浦智子 講師	: 公衆衛生学、健康情報学、地域作業療法学	16
越智亮 講師	: 理学療法学、健康支援学	17
齋藤貴之 講師	: 民俗学、文化人類学	18
富山直輝 講師	: 運動老年学、健康支援、介護予防、作業療法学	19
林浩之 講師	: 作業療法学、脳卒中後運動麻痺、上肢運動	20
今井あい子 助教	: 健康支援学	21
松岡文三 助教	: 保健医療福祉学、理学療法学	22
大古拓史 助手	: 理学療法学、健康支援学	23
藤田玲美 助手	: 理学療法学	24

■経営学部

赤岡美津子 教授	：教育カウンセリング、教育心理学、教育社会学、家族関係論、キャリア教育論 ……	26
秋山健太郎 教授	：経営学、エネルギー・産業政策、経営戦略論 ……	27
天野圭二 教授	：環境情報論、環境経営論 ……	28
雨宮康樹 教授	：労働経済学、欧州経済論、企業経営演習 ……	29
小川純子 教授	：教育制度論、教育課程論、教職論、教育原理、特別支援教育 ……	30
加藤省三 教授	：情報工学、経営工学 ……	31
加藤幹根 教授	：保健体育科教育、体育行政論、体育・スポーツ史 ……	32
北野達也 教授	：地域医療、医療安全、医療の質、医療経営・管理、医学教育 等 ……	33
小林康男 教授	：英文学、英国文化、時事英語 ……	34
鈴木愛一郎 教授	：コーポレートファイナンス、M&A、会社法 ……	35
Martin Snyder 教授	：英語、ビジネス英語、異文化理解 ……	36
傍嶋則之 教授	：まちづくり政策、地域ブランド開発、農商工連携支援、着地型観光 ……	37
高須博 教授	：保健体育科教育法、道德教育研究、教職論、教育課程論 ……	38
田中信幸 教授	：教育制度論、教育経営論、教育課程論、特別活動論 ……	39
崔俊 教授	：戦略経営、危機管理、技術経営、人的資源管理 ……	40
松原隆治 教授	：考古学、博物館学、遺跡・史跡の保存と活用 ……	41
横井康博 教授	：スポーツマネジメント、スポーツ社会学、スポーツビジネス ……	42
盧聰明 教授	：経営学、組織論、企業文化論 ……	43
石田隆城 准教授	：流体力学、計算理工学、空気調和工学 ……	44
加藤知子 准教授	：言語、英語、キリスト教 ……	45
神野真寿美 准教授	：英語教育 ……	46
野村淳一 准教授	：経営情報学、経営工学、社会システム工学、教育工学 ……	47
山田正人 准教授	：マルチメディア論(景観論)、都市計画学(都市交通論)、都市・生活情報論 ……	48
伊藤春子 講師	：日本語教育学 ……	49
日下部直美 講師	：現代中国語文法、中国語教育、言語学 ……	50
高崎義幸 講師	：地域社会学 ……	51
長澤省吾 講師	：運動生理学、水泳 ……	52
西村知晃 講師	：組織行動論、人的資源管理論 ……	53

注1) 教員の配列は職ごとの 50 音順

注2) 教員からの任意の提出による（全教員の研究シーズを掲載したものではありません）

リハビリテーション 学部

I 専門分野

リハビリテーション医学全般

II キーワード

障害者、血流、超音波

III 研究テーマ

1. 脳卒中・脊髄損傷者等の障害者における血流動態（下肢、心、頸部）の研究
2. 脊髄損傷患者の合併症（自律神経過反射、起立性低血圧、筋損傷などに関する）の臨床的研究
3. 血管拡張反応（Flow Mediated Dilation : FMD 法）による健常者・障害者の動脈硬化の研究

IV 研究紹介

1. 脳卒中、脊髄損傷患者はの血流動態で下肢深部静脈血栓症の機械的予防はいまだ明確ではない。予防法は何が合理的に良いか、全く新しい視点より運動を中心に静脈還流が増加する方法をみいだし、研究を進めているところである。また起立時の脳の血流動態も別な視点より研究を行っている。
2. 脊髄損傷者の合併症は多い。特に自律神経過反射に注目して従来の原因以外にも起こりうる。合併症を中心に臨床研究を進めている。
3. 早期の動脈硬化を測る指標として血管内皮機能検査がある。血流依存性血管拡張反応と呼ばれ血管エコーにて上腕動脈にて評価するものである。この評価は各種介入で変動することが特徴である。既に若年者から高齢者までの健常者の多数例のデータ蓄積はおこなっている。現在脳卒中片麻痺患者を対象として介入による血管内皮機能の研究を行っている。

【参考】

■プロフィール：宮城県生まれ、産業医科大学卒業、2008 年より星城大学教授

■担当科目：リハビリテーション概論、リハビリテーション医学、内科学Ⅰ、内科学Ⅱ、一般臨床医学、画像診断学、大学院：病態運動学リハビリテーション学特論Ⅰ、運動器障害系リハビリテーション学特論Ⅱ、健康支援学研究法

■社会的活動：厚生労働省理学療法士・作業療法士国家試験委員、日本リハビリテーション医学会中部東海地方会幹事など

■主な著書・論文など

著書（過去 2 年）

- ・「NEW エッセンシャル整形外科学」2012 年 医歯薬出版 p515-516

論文（過去 2 年間）

- ・脊髄損傷対麻痺者に対する深呼吸、他動運動が大腿静脈血流に与える影響
日本脊髄障害医学会誌 27 巻(1) p20-24,2014
- ・脊髄障害患者の深部静脈血栓症 当院での最近の頻度
日本脊髄障害医学会誌 27 巻(1) p148-149,2014
- ・二分脊椎に脳出血を合併した成人例. 日本脊髄障害医学会誌 26 巻(1), p156-157, 2013
- ・脊髄損傷患者の筋損傷に対するエコー診断の有用性.日本脊髄障害医学会誌 25 巻(1), p51-52, 2012
- ・Development of hand-assist robot with multi-degree-of-freedom for rehabilitation therapy.
Mechatronics vol17(1),p136-146, 2012

I 専門分野

リハビリテーション医学、理学療法学

II キーワード

運動療法、脳血管障害、運動器障害、健康支援

III 研究テーマ

1. 脳血管障害者に対する運動療法とリスク管理
2. 社会保障制度と医療提供体制、リハビリテーションの関係

IV 研究紹介

1. 脳血管障害は、わが国の最も高い有病率疾患であり、その大半はリハビリテーションの対象となる。脳血管障害は、高血圧・糖尿病・心疾患などの基礎疾患を背景に発生する循環器疾患であり、同時にその発生部位が脳であることから中枢神経疾患、さらにその症状の一つに左右いずれかの片麻痺を生じる運動器疾患であるという複合的疾患の特徴を有している。そのリハビリテーション・運動療法の実施に際しては、循環器疾患の特徴に配慮したリスク管理の下に行う必要があるものの、脳血管障害者の起立負荷や運動負荷時の循環動態は必ずしも明らかではなかった。そのため、脳血管障害者の起立時循環応答を観察し、健常高齢者・若年者と比較検討し、積極的に起立・歩行動作を行うことが重要であることを示した。
2. 日本の医療は、世界に類を見ない国民皆保険制度を昭和 36(1961)年に達成して、世界一の長寿国となった。しかし、近年の超高齢社会の到来と医療技術の発展から、疾病構造の重症化と自立生活の障害を招来することとなり、特に生活障害への対策として介護保険制度(2000 年)も創設された。生活障害を来す原因疾患の第一位は脳血管障害であり、その片麻痺という運動器疾患としての側面が影響を及ぼす。さらに、運動器官の障害は自立生活を困難にするだけでなく、自ら運動する機会を喪失することで二次的障害(廃用症候群)も惹起させることとなる。これらのことを、慢性期重症片麻痺例の基本動作能力検査から実証的検証を行い、その結果から運動療法のあり方、およびリハビリテーションの社会的責務を示した。

【参考】

- プロフィール：福岡県北九州市生まれ、九州リハビリテーション大学校理学療法学科卒業、弘前大学大学院医学研究科修了、2003 年より星城大学教授
- 担当科目：神経筋障害理学療法学、理学療法学研究法、運動器障害系リハビリテーション学
- 社会的活動：日本理学療法学会大会査読員・座長、全国大学理学療法教育研究会評議員、社会福祉法人さつき福祉会理事、東海市健康づくり推進会議委員
- 主な著書・論文など
 - ・「脳血管障害者における起立負荷時の循環応答と頸動脈血流」理学療法科学、28(4)2013、共著
 - ・「基本動作練習のコツ ―片麻痺者の移乗動作と運動療法のコツ―」理学療法ジャーナル、44(1)2010、単著
 - ・「中枢神経障害理学療法学テキスト」2008、南江堂、編集
 - ・”Initial Drop of Blood Pressure during Head-up Tilt in patients with Cerebrovascular Accidents.” Environmental Health and Preventive Medicine 9(5) 2004、共著

I 専門分野

脳神経科学、神経解剖学

II キーワード

咀嚼 (噛むこと)、ストレス、認知機能、骨粗鬆症

III 研究テーマ

1. 噛むことによるストレス緩和機構の解明
2. 噛むことによる脳賦活機構の解明
3. 噛むことが全身に及ぼす影響の解明

IV 研究紹介

1. 噛むことによるストレス緩和機構の解明

現在社会は格段に便利になりましたが、社会の変革が進みその分多種多様なストレスにさらされるようになりました。ストレスは小さくても長く続くと精神疾患、胃潰瘍などの疾患を引き起こすことがわかっています。我々は噛むこと (チューイング) でストレス反応が緩和されることを明らかにしてきました。チューイングという極めて簡単な方法でストレスが緩和されるという研究成果は、現在のようなストレス社会において朗報といえます。

2. 噛むことによる脳賦活機構の解明

我が国は高齢社会に突入し、認知症を発症する高齢者が急増しています。健康で楽しい老後を過ごすためには認知症予防に真剣に取り組む必要があります。我々は噛むことで脳の活性が高まることを明らかにしてきました。噛むことが高齢社会における認知症予防や脳リハビリに効果的であることを社会に情報発信していきます。

3. 噛むことが全身に及ぼす影響の解明

歳を重ねるにつれ歯の数が少なくなり、うまく噛めない高齢者が増えています。我々は歯の喪失が認知機能障害や骨粗鬆症を悪化させることを明らかにしてきました。自分の歯で楽しみながら食事をすることの大切さを社会に広めたいと考えています。

【参考】

- プロフィール：和歌山県生まれ、歯科医師、岐阜大学大学院医学研究科修了 (医学博士)、2009 年より星城大学教授
- 担当科目：解剖学、解剖学実習
- 社会的活動：西知多医療厚生組合情報公開・個人情報保護審査会委員、西知多医療厚生組合行政不服審査会委員、日本解剖学会評議員、SAM 研究協議会評議員
- 主な著書・論文など
 - ・噛むチカラでストレスに勝つ、健康と良い友だち社、共著
 - ・ Learning deficits and suppression of the cell proliferation in the hippocampal dentate gyrus of offspring are attenuated by maternal chewing during prenatal stress. *Neurosci Lett*, 2014, 共著
 - ・ Chewing ameliorates chronic mild stress-induced bone loss in senescence-accelerated mouse (SAMP8), a murine model of senile osteoporosis. *Exp Gerontol*, 2014, 共著
 - ・ Mastication as a Stress-Coping Behavior. *BioMed Res Int*, 2015, 共著
 - ・ Hippocampus-dependent spatial memory impairment due to molar tooth loss is ameliorated by an enriched environment, *Arch Oral Biol*, 2016, 共著.
 - ・ Effects of occlusal disharmony on the hippocampal dentate gyrus in aged senescence-accelerated mouse prone 8 (SAMP8). *Arch Oral Biol*, 2016, 共著

I 専門分野

精神障害者地域生活支援、精神科作業療法、障害者スポーツ、就労支援

II キーワード

精神障害、作業療法、障害者スポーツ、就労支援

III 研究テーマ

1. 精神障害者の地域生活に関する研究
2. 精神障害者スポーツに関する研究

IV 研究紹介

1. ここ数年、精神障害者は毎年約 10 万人ずつ増えて 300 万人を超えています。また、平成 22 年に行われた「こころの健康政策構想会議」では健康・生活被害指標（障害調整生命年 DALY）を用い、精神疾患を 3 大疾患の 1 つとしました。精神障害者の地域生活支援は、重要な課題であり、就労・家族支援を含めた地域での生活支援に取り組んでいます。
2. スポーツと健康は、密接な関係があります。精神障害者スポーツの中心が、入院患者から地域生活者になり、バレーボール、フットサルが地域で行われるようになりました。今後、さらに地域で生き生きと精神に障害がある方と一緒にスポーツを行い、普及、啓発、研究にも取り組んでいきたいと考えています。

【参考】

■プロフィール：佐賀県鳥栖市出身、神戸大学医療技術短期大学部卒業、神戸大学大学院医学系研究科博士課程修了（保健学博士）、大村病院、いぬお病院、第一医療リハビリテーション専門学校、健康科学大学、2011 年より星城大学リハビリテーション学部教授、作業療法士・精神保健福祉士教育・研究と共に、臨床・地域で精神に障害がある方と関わり、お互いに成長していきたいと模索している。

■担当科目：精神障害作業療法学Ⅰ・Ⅱ、精神障害作業療法学実習など

■所属学会：日本作業療法士協会、日本精神保健福祉士協会、日本デイケア学会、日本職業リハビリテーション学会、日本精神障害リハビリテーション学会、日本スポーツ精神医学会など

■社会的活動：日本作業療法士協会評議員、日本デイケア学会理事、日本ソーシャルフットボール協会理事、日本陶芸療法協会理事、九州地区精神障害スポーツ推進連絡協議会会長、第 5,6,7,8,9,11,12 回全国障害者スポーツ大会九州・沖縄ブロック代表監督(精神障害)など

■主な著書・論文など

- ・臨床精神科作業療法入門（文光堂）共著
- ・図解作業療法技術ガイド（文光堂）共著
- ・作業療法のとらえかた（文光堂）共著
- ・Kazuya Sakai, Takeshi Hashimoto, Sadafumi Inuo :, Factors Associated with Work Outcome among Individuals with Schizophrenia : Investigating Work Support in Japan . WORK32(2). 2009
- ・坂井一也, 杉村直哉：精神科早期退院促進プログラムの開発と作業療法の実践 初回入院・早期退院事例. 作業療法 27(5). 2008
- ・坂井一也, 春山佳代, 山下佐織, 杉村直哉：統合失調症に対するデイケアにおける就労支援プログラム－5 年間の追跡調査－. 健康科学大学紀要 7. 2011
- ・坂井一也：スポーツを通してのノーマライゼーション～精神障害者からアスリートへ～. 戸山サンライズ. 2009

I 専門分野

高齢者健康支援学、認知症予防、介護予防、社会疫学

II キーワード

認知症予防、介護予防、高齢者健康支援、憩いのサロン事業

III 研究テーマ

1. 心理社会面に着目した高齢者のための包括的支援に関する研究
2. 憩いのサロン事業を活用した介護予防・認知症予防に向けた介入研究
3. 心理社会面に着目した認知症予防に関する研究

IV 研究紹介

1. 愛知県武豊町で自治体と地域住民との共同研究として、心理社会面に着目した介護予防・認知症予防のための「憩いのサロン」事業を活用した介入研究と効果の検証に取り組んでいる。
2. 認知症予防に向けた「認知症リスクチェックリスト」を作成し普及に努めている。
3. 全国 31 自治体 14 万人の高齢者調査とその後の追跡から認知症を伴う要介護認定の心理社会的危険因子の解明と介入策の提言に取り組んでいる。

【参考】

■プロフィール：広島県出身、1978 年日本福祉大学社会福祉学部卒業、1982 年国立療養所東名古屋病院附属リハビリテーション学院卒業、1982 年から名古屋市厚生院、有馬温泉病院などで勤務、その後 2003 年茨城県立医療大学保健医療学部助教授、2005 年星城大学リハビリテーション学部教授、博士（社会福祉学）

■担当科目：医療学入門、作業療法学特論Ⅱ（認知症）、作業療法学研究法、作業療法学研究法特論など

■所属学会：日本公衆衛生学会、日本老年精神医学会、日本認知症ケア学会、日本認知症予防学会など

■社会的活動：日本認知症予防学会評議員、東海市まちづくりアドバイザーなど

■主な著書・論文など

- 1) 「認知症介護実践者研修標準テキスト」、ワールドプランニング、分担執筆、2016.
- 2) 「認知症の作業療法」第 2 版、医歯薬出版、編著、2016.
- 3) Health Inequalities in Japan : An Empirical Study of the Older People. Trans Pacific Press, Melbourne. 分担執筆、2010.
- 4) 「検証健康格差社会 介護予防に向けた社会疫学的大規模調査」、医学書院、分担執筆、2007.
- 5) Positive affect and incident dementia among the old. Journal of Epidemiological Research 2 : 118-124, 2016. (共著)
- 6) Effect of community intervention program promoting social interactions on functional disability prevention for older adults: propensity score matching and instrumental variable analyses, JAGES Taketoyo study. Journal of Epidemiology & Community Health. doi: 10.1136/jech-2014-205345. (共著)
- 7) 地域介入研究による介護予防効果検証：武豊プロジェクト. 総合リハビリテーション 42 : 623-629, 2014. (単著)
- 8) 認知症の一次予防に着目した取り組みと可能性. 日本認知症ケア学会誌 11 : 629-634, 2012. (単著)
- 9) 地域在住高齢者における認知症を伴う要介護認定の心理社会的危険因子－AGES プロジェクト 3 年間のコホート研究. 日本公衆衛生雑誌 57 : 1054-1065, 2010. (共著、筆頭)

I 専門分野

応用言語学、教材開発、翻訳論

II 研究テーマ

1. 英語教材開発研究
2. コンピューター教材開発

III 研究紹介

私の研究は教授法で、教材についていろいろ研究している。例えば、同じ材料（新聞の記事や会話）をいじることで初級・中級・上級の教材を作ることができる。特に英語力が低い人のための教材を考え、新しい練習方法を作っている。作ったものを試し、それから学生の反応や教材の効果というフィードバックをもとに改善していく。このように、学生を教材に合わせるのではなく、教材を学生に合わせるわけである。

【参考】

■プロフィール：アメリカ生まれ、テンプル大学大学院教育学研究科博士課程修了（教育学博士）、2002年から星城大学リハビリテーション学部教授

■担当科目：英語 I、英語 II、総合英語 I、総合英語 II、ビジネス英語 I

■社会的活動：全国外国語教育学会[JALT]教材作成支部・会計担当者、JALT の内部監査の一人

■主な著書・論文など

- 1998 *The Effect of Learning Nouns in Lexical Sets*. Dissertation submitted in partial fulfillment for the degree of Doctor of Education, Graduate Division, Department of Curriculum, Instruction and Technology in Education.
- 2002 *The Changing Face of CALL: Emerging Technologies, Emerging Pedagogies*. Proceedings of the 6th Annual JALT CALL Conference, Kanto Gakuen University.
- 2006 Logic Puzzles for Fun and Review. *JALT Applied Materials CD-ROM*: 59-62.
- 2006 Single-page, multiple-view Web pages for reading ease. *The JALT CALL Journal*, 2(3), 53-61.
- 1995 Considerations for expanding a computer laboratory. *Bulletin of Nagoya Meitoku Junior College* #9. 111-132.
- 1994 The reading process as indicated by lexical inferencing. *Bulletin of Nagoya Meitoku Junior College* #6. 27-48.

I 専門分野

運動学、電気生理学、心身健康科学

II 研究テーマ

1. 表面筋電図による運動解析
2. 表面筋電図波形分析方法の検討

III 研究紹介

1. 表面筋電図は、皮膚表面に貼付した電極から、筋肉が働いたときに発生する「活動電位」を検出し、運動中の筋機能を分析する機器です。この機器を用いて、腰部、膝関節、肩関節の運動メカニズムを解析し、様々な筋電図学的評価指標を提案してきました。
2. 表面筋電図測定で得られた波形を従来の方法で分析した場合に検出し得なかった状況を新しい分析指標を用いることで可能にする試みを行っています。これまでに、加齢による骨格筋の変化、筋疲労の検出に成果をあげています。
3. ミラーボックスは 1996 年に、インドの学者によって報告された鏡を用いた身体機能回復の治療法です。麻痺や痛みの改善に効果があるとされていますが、どのようなメカニズムによってその改善が起こるかは明らかにされていません。私はこれまでに、ミラーボックスを用いて図形描画を行った際に、被治療側に起こる筋機能の変化を測定し報告しています。

【参考】

■プロフィール：岐阜県海津市生まれ、国立療養所箱根病院附属リハビリテーション学院 理学療法学科卒業、人間総合科学大学大学院 心身健康科学研究科博士後期課程修了（心身健康科学博士）、2007年から星城大学勤務

■担当科目：運動学、運動学実習、臨床運動学、情報処理演習など

■社会的活動：日本理学療法協会、日本理学療法連盟、愛知県理学療法協会、日本臨床神経生理学会、日本心身健康科学会、シニアフィットネス研究会などの会員

■主な著書・論文など

- ・「学生のための物理療法学」 2004 年、大学教育出版 共著
- ・「転倒予防・介護予防のための運動器機能向上トレーニングマニュアル」 2008 年、大伸社 共著
- ・「理学療法ゴールドマスターテキスト第 2 巻 運動療法学」 2010 年、メジカルビュー 共著
- ・肩関節内転運動時の三角筋活動の表面筋電図学的分析－三角筋前部線維の活動に着目して－ 2007 年 心身健康科学 単著
- ・Motion of drawing hand induces a progressive increase in muscle activity of the non-dominant hand in Ramachandran's Mirror-Box. Journal of Rehabilitation Medicine 44(11), pp939-943, 2012, 共著
- ・「こころ」が運動に与える影響を科学する How does human mind influence motor function? -The introduction of indices that may reveal it-、心身健康科学、第 8 巻 2 号、pp20-26、2012、単著

I 専門分野

文化人類学

II キーワード

小話、詩、漫画、音楽医療

III 研究テーマ

1. 小メディア研究
2. エジプトの精神リハビリ事情

IV 研究紹介

1. 暴力に訴え、変革を直接的に訴える姿勢がある。テロ、ストライキなど、多くの場合流血を伴う。31年間政権の座にあったエジプトのムバラク大統領を辞任に追い込んだ2011年の1・25革命は、まさに直接的な訴えだった。それに対して、間接的、消極的な政治姿勢もある。諺、政治談義、政治漫画、戯れ歌、小話などの手段がそうである。諺、漫画、小話などの小メディアには独特の政治姿勢がみとれる。
2. 歴史時代における精神病患者は社会から隔離されていなかった。現代の精神病患者の問題はノーマライゼーションに伴って、精神病患者を社会に復帰させる困難さである。ついこの間までは半世紀間、精神病患者を隔離する医療が普及したのだった。その後遺症であろう。いくら時代の波とはいえ、社会に姿を現した患者を家族も社会もまだ簡単には受け入れない現実がある。長い隔離の期間のゆえ、既に患者の近親は大方死亡している。こうして患者が病院に逆戻りするケースも出ている。とはいえ、エジプトのリハビリ医療はイスラエルとの戦争での負傷者への治療を契機として急ピッチで整えられ、今では精神病患者への音楽療法も普及し始めている。歴史時代の精神病患者医療、イギリスの支配時代の医療、そして、20世紀半ば以降の近代医療の普及の経緯を辿りながら、今家族や社会が患者とどう向き合うかを中心に研究している。

【参考】

■プロフィール：長野県塩尻市生まれ、慶応義塾大学文学部卒業、2016年より星城大学教授

■担当科目：東洋文化論、文化人類学

■社会的活動：東海市文化財調査委員

■主な著書・論文など

- ・『金沢一伝説・再生・アメニティー』御茶の水書房、1991、共著
- ・『東海地域の社会と文化―ブレイン・コミュニティ』御茶の水書房、2002、共著
- ・「現代エジプトにおけるリハビリテーションの音楽療法」とうかい歴史の小径、2011年、東海市立平洲記念館、11頁、単著
- ・「エジプト人の今の職業」とうかい歴史の小径、東海市立平洲記念館、22頁、単著

I 専門分野

理学療法学・健康支援学

II キーワード

日常生活行動・健康支援・高齢者・転倒予防

III 研究テーマ

- ①日常生活行動と健康支援
- ②高齢者の転倒予防

IV 研究紹介

- ①「日常生活行動と健康支援」をテーマに研究活動を行っています。現在、病院・施設に入院・入所または外来受診されている要支援・要介護高齢者の方を対象に、日々の生活行動を身体活動量の観点から分析し、健康の維持・増進を図るための方策について検討しています。
- ②「高齢者の転倒予防」をテーマに研究活動を行っています。昨今、実際の動作に近い感覚でスポーツを体験できるゲームが脚光を浴びています。そこで、ゲームによる運動効果を検証し、高齢者の転倒予防を目的としたトレーニングメニューについて取り組んでいます。

【参考】

- プロフィール：愛知県生まれ、理学療法士、博士（医学）
- 担当科目：日常生活活動学・地域理学療法学セミナー など
- 社会的活動：日本理学療法士協会、愛知県理学療法士会、理学療法科学学会、専門リハビリテーション研究会、健康レクリエーション研究会などの会員
- 主な著書・論文など
 - ・『福祉用具ハンドブック』大井企画 2013. 共著
 - ・『転倒予防のための運動器機能向上トレーニングマニュアル』南江堂 2013. 共著
 - ・『二重課題歩行時の注意分散が予期機構（視覚情報）に与える影響』健康レクリエーション研究 2016. 共著
 - ・『日常生活活動の安全面からみた Timed up and Go テストの有用性』理学療法科学 2015. 共著
 - ・『在宅脳血管障害患者の気温変化による日常生活への影響』理学療法科学 2015. 共著
 - ・『高齢者における歩行援助ツールとしての歩行支援機 ACSIVE の有用性』健康レクリエーション研究会雑誌 2015. 共著
 - ・『ゲーム機器が高齢者のバランス機能に与える影響』岐阜県理学療法士会学術誌 2013. 共著
 - ・『立ち上がり動作直後の重心動揺の違いから見た転倒リスクについて－若年者と高齢者の比較から－』岐阜県理学療法士会学術誌 2013. 共著

I 専門分野

理学療法学

II キーワード

バイオメカニクス (骨関節)、変形性膝関節症、スポーツ傷害、高齢者の運動機能向上、
デイサービス、ものづくり

III 研究テーマ

1. バイオメカニクスの視点を基にした運動器疾患の病態解析と高齢者の運動機能向上
2. 臨床現場からのものづくり ―今、患者さんを良くしたい―

IV 研究紹介

1. 50 歳以上の女性の 3 人に 2 人、男性の 2 人に 1 人は、変形性膝関節症と言われています。この膝の障害がいずれ転倒・骨折・要介護と深く関連してきます。そのため、中年期や前期高齢者においてその予防がとても重要です。私の研究室では、現在特に発症前の 40 歳代に注目して MRI 計測による膝の軟骨評価と歩行時の膝にかかる力を比較して、その予防法を検討しています。またより早期に症状を予測すること为目标に関節を動かした時の振動 (関節の摩擦) を計測する方法を検討しています。また、高齢者を対象として、ポールウォーキングという両方にポールをもった歩行の解析から臨床応用・地域での実践を行ってきました。
2. 日々の目の前の患者さんを「今」良くすることを、目標にものづくりを続けてきました。今よくするためには、ハイテクではなくローテクしかありません。ローテクを組み合わせていろいろな工夫ができます。今までに肩関節の夜間痛軽減サポータを開発し効果を検証しました。現在、特に力を入れているのは、膝関節サポータにゴムチューブを装着して、その場で患者さんの歩行を観察しながらテーラーメイドでアシストの強さを修正することを可能にした装具です。これは、脳卒中片麻痺患者さん、変形性膝関節症患者さんに効果があると考え現在その検証を進めています。また更にこれを応用し転倒予防の膝アシストサポータも開発しました。こちらも検証を進めていきます。

【参考】

- プロフィール：愛知県安城市生まれ、名古屋大学大学院医学系研究科博士後期課程 2008 年修了、2013 年より星城大学准教授
- 担当科目：運動器障害理学療法学実習、理学療法評価診断学 I、運動障害理学療法学、理学療法技術演習 I、理学療法評価診断学実習
- 社会的活動：NPO 法人愛知県理学療法学会学術誌部長、スポーツ傷害予防研究会代表世話人
- 主な著書・論文など
 - ・ Ota S, Goto H, Noda Y, Fujita R, Matsui Y. Relationship between standing postural alignments and physical function among elderly women using day service centers in Japan. J Back Musculoskelet Rehabil. 2014. (in press)
 - ・ Ota S, Ueda M, Aimoto K, Suzuki Y, Sigward SM. Acute influence of restricted ankle dorsiflexion angle on knee joint mechanics during gait. Knee. 2014;21:669-675. doi: 10.1016/j.knee.2014.01.006.
 - ・ Ota S, Nakanishi A, Sato H, Akita S, Hase K, Suzuki Y. Differences in knee joint kinematics and kinetics during level walking and walking with two types of poles - focus on knee varus moment -. J Musculoskelet Res. 2013;16(4)1350018 (9pages). DOI: 10.1142/S0218957713500188
 - ・ Ota S, Goto H, Fujita R, Haruta M, Noda Y, Tamakoshi K. Application of pole walking to day service centers for use by community-dwelling frail elderly people. Int J Gerontol. 2014;8:6-11. DOI: 10.1016/j.ijge.2013.03.010

I 専門分野

哲学・倫理学・宗教学

II キーワード

よく生きる、幸福、苦

III 研究テーマ

1. よく生きることについて
2. 世界や人生を肯定することについて

IV 研究紹介

1. 「最も大切なのは、生きることではなく、よく生きることだ」というのは、プラトンの作品におけるソクラテスの言葉である。では、「よく生きる」とはどう生きることか。この問いは、我々人間の生き方に関わるという意味で、倫理学の問いである。そして、倫理学が、我々人間の生き方について深く掘り下げて考えるものである限り、この問いは哲学の問いである。このような意味で、我々人間の生き方について哲学することを試みている。(例えば、普通我々は「幸福な人生」を求める。そしてその際、我々は、そうとは知らず、「幸福な人生」を「よく生きること」と解しがちである。だが、「幸福な人生」は本当に「よく生きること」なのだろうか?…例えばこのような仕方でも問いを深める作業を試みている。)
2. 我々人間は、通常、自分が満足できる人生や世界を求めている。しかしながら、自分の思い通りにならないのが世の常であり、その意味で、何らかの意味での苦が我々には付きものである。だからこそ、我々は通常、自分の思い通りにはならない人生に、何らかの仕方でも折り合いをつけながら生きている。では、すると、どのような折り合いのつけ方が、より望ましいのだろうか。言い換えれば、生きることに伴う大小様々な苦にいかなる仕方でも対処するのが(あるいは場合によってはむしろ対処しないのが)望ましいのか。このような問いは仏教をはじめとする宗教の問いであるとも言える。故に、その点も考慮に入れた上で、苦への哲学的な対処法の探求を試みている。

【参考】

■プロフィール：鳥取県鳥取市生まれ、東京大学文学部卒業、2014年より星城大学准教授

■担当科目：哲学、倫理学、他

■社会的活動：実存思想協会幹事

■主な著書・論文など

- ・『通訳ガイド 地理・歴史・一般常識 過去問解説 平成27年度問題収録』2015年、法学書院、監修
- ・『フィヒテ全集 第10巻 哲学評論・哲学的書簡』2015年、哲書房、共訳
- ・「肯定についての試論」2015年、『研究紀要』第14号、単著
- ・「よく生きるとはどう生きることか—幸福についての試論—」2014年、『國學院大學紀要』第52号、単著
- ・「ニーチェの永遠回帰の思想の意味と位置付け—断章V 11[141]の叙述に基づいて—」2012年、『國學院大學紀要』第50号、単著
- ・『通訳ガイド 地理・歴史・一般常識 完全対策 改訂第5版』2011年、法学書院、編著

I 専門分野

理学療法学

II キーワード

末梢循環障害、糖尿病足病変、足病変予防、人工炭酸泉

III 研究テーマ

1. 個人研究 足病変を有する症例の足底にかかる負荷量の測定方法に関する検討
2. 共同研究 足病変形成予防にむけた力学的負荷量軽減方策に関する検討
人工炭酸泉による部分浴・全身浴に伴う生体反応に関する検討

IV 研究紹介

1. 足病変を有する症例の足底にかかる負荷量の測定方法に関する検討
足部の潰瘍再発は、下肢切断リスクを高め、要介護状態に陥る原因となる。潰瘍の再発は足部の力学的負荷量の増加が原因となることが指摘されているが、これまで再発予防に向けた具体的な数値目標は提示されていなかった。
そこで研究テーマとして足底にかかる力学的負荷量測定器の開発を行い、力学的負荷軽減方策について研究を進めている
2. 人工炭酸泉による部分浴・全身浴に伴う生体反応に関する検討を行っている。

【参考】

■プロフィール：愛知県名古屋市生まれ。最終学歴 名古屋大学大学院医学系研究科博士課程修了。

名古屋大学医療技術短期大学部 卒業後、名古屋共立病院、名古屋大学医学部保健学科（理学療法学専攻 助教）を経て 2012 年 4 月より現職。

■担当科目：

【前期】

内部障害理学療法学 (3 年生)
評価診断学演習 (3 年生)
運動療法学 (2 年生)

【後期】

内部障害理学療法学実習 (3 年生)
理学療法技術特論Ⅱ (3 年生)
理学療法評価診断学Ⅱ (2 年生)
運動療法学実習 (2 年生)

【通年・集中】

臨床実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、理学療法学セミナー、理学療学研究法特論

■社会的活動：下肢救済足病学会 【編集委員・評議員】

日本血管外科学会 【チーム医療推進委員】

日本理学療法士学会 【学術大会準備委員】 日本糖尿病理学療法学会 【運営幹事】

The Association for the Advancement of Wound Care's (AAWC) 【Research committee】

愛知県理学療法士会 【白書委員会循環器班 代表】

所属学会： 日本脈管学会、日本看護医療学会、心臓リハビリテーション学会

■主な著書

- ・林 久恵 (野村卓生・河辺信秀 編), 身体機能・歩行動作からみたフットケア, 文光堂, pp78-92, 2016
- ・林 久恵 (内山 靖 編), 理学療法診療指針. 医学書院, pp428-431, 2015
- ・林 久恵 (大平雅美 他 編), 糖尿病理学療法. 株式会社メジカルビュー社, pp280-286, 2015,
- ・近藤恵理子・林 久恵 (内山 靖 編), エビデンスに基づく理学療法 改訂第 2 版. 医歯薬出版株式会社, pp 254-267, 2015
- ・林 久恵 他 (西田壽代 編), はじめよう！フットケア 第 3 版, 日本看護協会出版, pp220-224, 2013
- ・林 久恵 (山崎裕司 他編), 内部障害理学療法学テキスト. 改訂第 2 版, 南江堂, pp 203-118, 2012
- ・林 久恵(上村哲司 編), 足病変ケアマニュアル. 学研メディカル秀潤社, pp 104-109, 2010

I 専門分野

日常生活活動学、健康支援学、高次脳機能障害治療学

II キーワード

認知症予防、手段的日常生活活動、生活支援、評価

III 研究テーマ

1. 認知症予防のための認知評価および生活支援方法の検討
2. アルツハイマー型認知症者の日常生活活動評価と生活支援方法の検討

IV 研究紹介

1. 我が国では、急速に高齢化が進行し、認知症予防事業が地域在住高齢者を対象に進められています。私は、東海市の介護予防事業における認知症予防と閉じこもり予防を目的とした「脳健康教室」と「いきいき元気教室」において、参加者の認知面と生活面の維持を目的に、どのような評価項目や取り組みが予防に役立つのかについて、研究しています。
2. 認知症において最も比率の高いものはアルツハイマー病(AD)です。AD者に対する生活活動が、症状進行とともにどのように変化するかについては、未だ検討が不十分です。現在、私は、AD者の日常生活活動が、重症度によってどのように異なるのか調べています。このことを明らかにすることによって、AD者の生活援助に寄与するものと考えています。
3. アルツハイマー病(AD)者とその前駆段階である軽度認知症障害(MCI)者は主に記憶力が低下します。そのため家庭での生活においては、服薬管理や火の始末などの日常生活活動が特に上手く実行できなくなります。そこで、これらの日常生活活動の実行度を向上させるための記憶支援機器の開発に向けた基礎研究を行っています。

【参考】

■プロフィール：三重県いなべ市生まれ、国立療養所東名古屋病院附属リハビリテーション学院作業療法学卒業、金沢大学大学院医学系研究科博士課程修了（保健学博士）、2006年から星城大学リハビリテーション学部講師、2010年より准教授

■担当科目：高次脳機能作業療法学、高次脳機能作業療法学演習、日常生活活動学、日常生活環境学

■社会的活動：東海市介護予防教室講師、愛知県学術部員、日本作業療法協会事例検討委員

■主要著書・論文など

- ・砂原伸行、中谷謙、藤田高史、酒野直樹、井上克己：健常人における音の左右方向判断能力、つるま保健学会誌 36(1)、21 - 26、2012
- ・Takashi Fujita, Masako Notoya, Nobuyuki Sunahara, et. al : Development and review of the validity of an “instrumental activities of daily living test” (IADL test) performed as a desk evaluation of patients with Alzheimer’s type of dementia, Journal of the Tsuruma Health Science Society : 1-13, 2010
- ・藤田高史、二木淑子、高橋美幸、杉本まみ、能登谷晶子：軽度アルツハイマー病患者に対する遂行機能評価としての片づけ検査の妥当性、作業療法 28 : 396-409、2009

I 専門分野

整形外科（手外科）分野におけるリハビリテーション、装具療法学、作業療法学

II 研究テーマ

1. 手の怪我とリハビリテーション

III 研究紹介

1. 手の怪我には様々な種類があります。手は脳で考えた日常生活における様々な動作を具体化するために、複雑な動きを行います。これらが怪我などで一旦失われてしまうと、直接的に日常生活における動作の障害につながります。医師により手術などの治療が行われますが、それだけでは十分とは言えません。つまり手術などの後にしっかりとリハビリを行わないと満足できる手の使用が出来ないのです。そこで、手のリハビリテーションでは様々な器具や装具を用いてなるべく良い状態で日常生活に復帰できるようお手伝いしています。怪我をされていない方でも、手のリハビリテーションに対しての基本的な知識があれば、手の状態を自分で管理する事が出来るかも知れません。

【参考】

- プロフィール：島根県出雲市生まれ、広島大学医学部保健学科作業療法学専攻卒業、広島大学大学院医学系研究科博士課程修了（保健学博士）広島土谷総合病院、名古屋掖済会病院、2010年から星城大学リハビリテーション学部 認定ハンドセラピスト、専門作業療法士（手外科）
- 担当科目：身体障害作業療法学、義肢装具学、ハンドセラピー特論
- 社会的活動：NPO 法人ハンドフロンティア理事
- 主な著書・論文など
 - ・日本手外科学会雑誌投稿論文 3 編
 - ・愛知県作業療学会誌投稿論文 3 編など

I 専門分野

公衆衛生学、健康情報学、地域作業療法学

II キーワード

リハビリテーション、作業療法、Shared Decision Making、Evidence-based Practice

III 研究テーマ

1. 健康（医療・介護）に関する情報のあり方（つたえ方、うけとり方）に関する研究
2. 医療・介護における情報共有・意思決定に関する研究
3. 患者・利用者のニーズに関する研究

IV 研究紹介

1. 人々の健康への関心は高まっています。テレビやラジオ、インターネットなどには様々な情報が流れ、個人の意思決定に影響を及ぼしています。地域で暮らす高齢者の方々がどんな健康情報に関心を持っているか、どうやって健康情報を入手しているか、などについて調査をしています。
2. 医療や介護の意思決定場面において、患者・利用者と医療・介護提供者間の情報共有は容易なものではありません。特に、すでに効果が実証されている治療法に関する知見と在宅要介護高齢者のニーズが、リハビリテーションの目標設定やプログラム立案時にどのように反映されているかについて、研究を進めています。

【参考】

■プロフィール: 大阪府生まれ、国立療養所近畿中央病院附属リハビリテーション学院作業療学科卒業、京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻博士後期課程研究指導認定退学（修士（専門職））。作業療法士として病院や施設、在宅におけるリハビリテーションに携わったのち、専門学校専任教員・NPO 委託研究員を経て、2010 年から星城大学リハビリテーション学部講師

■担当科目：(学部) 地域作業療法学、基礎作業学、作業療法学特論Ⅳ、作業療法学研究法、ほか(大学院) 健康支援学研究法、健康行動支援学特論、生活環境学特論

■社会的活動：日本訪問リハビリテーション協会教育研修部・認定審査会

■主な著書・論文など

- 1) Ohura T, et al. Gaps between the subjective needs of older facility residents and how care workers understand them: a pairwise cross-sectional study. *BMC Research Notes* 9: 52, 2016.
- 2) Ohura T, et al. Differences between home-visit rehabilitation users and providers in their understanding of the content and subjective effects of rehabilitation practices. *J Phys Ther Sci* 27: 1705-1708, 2015.
- 3) Ohura T, et al. Testing validity and reliability of a newly developed instrument to assess the subjective needs of institutionalized elderly. *Clinical Gerontologist* 38: 88-102, 2015.
- 4) Ohura T, et al. Care goal setting and associated factors: semi-structured interviews with multidisciplinary care providers in facilities for elderly people, *International Journal of GERONTOLOGY* 8: 12-17. 2014.
- 5) Ohura T, et al. Reliability and validity tests of an evaluation tool based on the modified Barthel Index. *International Journal of Therapy and Rehabilitation* 18(8): 422 - 428, 2011.
- 6) 大浦智子, 他. 訪問リハビリテーション利用者のサービス利用のきっかけと生活目標, 作業療法 33: 517-525, 2014.
- 7) 大浦智子, 他. 介護支援専門員と訪問介護員における訪問リハビリテーション効果への期待: 量的・質的検討. 作業療法 32: 440-450, 2013.
- 8) 大浦智子, 他. 「憩いのサロン」参加者の健康情報源と情報の授受: サロンは情報の授受の場になっているか? 保健師ジャーナル 69: 712-719, 2013.

ほか

I 専門分野

理学療法学、健康支援学

II キーワード

転倒、高齢者、トレーニング、バイオメカニクス、筋

III 研究テーマ

1. 高齢者の転倒に関するバイオメカニクス研究
2. 筋電図／筋音図ハイブリッドセンサを用いた筋機能評価に関する研究

IV 研究紹介

1. 歩行中に障害物につまずいたり、床で滑ったりすることがあります。この時、素早く大きく足を踏み出すことができれば転倒を回避することができますが、運動機能が低下するとこの反応がうまくできずに転んでしまうことが多くなります。私は、高齢であつても転びにくい元気な方と、転びやすい虚弱な方の運動機能の違いはなにか、また転倒を回避するための足の踏み出し動作の運動機能を改善させるために効果的な運動トレーニングはなにかという点について研究をすすめています。
2. 筋肉は運動するために非常に重要な器官です。筋力トレーニングをすることで、発揮する力を強くし、素早い動作を可能にするなど、運動機能の向上が見込めます。一方で、運動機能の向上には筋肉の柔軟性も必要な要素です。筋力や筋の収縮速度は簡単に評価が可能ですが、筋の柔軟性の評価には高価な機器が必要です。私は、安価でかつ簡便な筋の柔軟性の評価を行う機器として、筋音図に着目し、岡山大学・京都大学と連携して筋電図／筋音図ハイブリッドセンサを用いた筋の柔軟性評価について研究を進めています。

【参考】

■プロフィール：2013年4月より星城大学リハビリテーション学部講師（生体情報修士）。2015年3月に京都大学大学院医学研究科博士課程修了満期退学

■担当科目：老年期障害理学療法学、物理療法学、理学療法技術演習など

■社会的活動：愛知県理学療法士協会知多ブロック委員、日本理学療法学会抄録査読員、愛知県理学療法学会誌査読員、日本基礎理学療法誌（JPTF）査読員、Journal of Physical Therapy Science 査読員など

■主な著書・論文など

- ・「理学療法評価学」2016、文光堂、共著
- ・「転倒予防のための運動機能向上トレーニングマニュアル」2013、南江堂、共著
- ・「標準理学療法学シリーズ、神経理学療法学」2013、医学書院、共著
- ・「理学療法学自習ワークブック」2012、診断と治療社、共著
- ・「機能障害科学入門」2010年、神陵文庫、共著
- ・「理学療法 MOOK16、脳科学と理学療法」2009年、三輪書店、共著
- ・Effect of balance exercise in combination with whole-body vibration on muscle activity of the stepping limb during a forward fall in older women: a randomized controlled pilot study. *Arch Gerontol Geriatr* 60(2): 244-51, 2015.
- ・Immediate effects of varying cadence in bicycle ergometry on characteristics of gait and lower extremity motor activity in frail older adults. *Aging Clin Exp Res* 27(1): 43-51, 2015.
- ・Differences in muscle activation patterns during step recovery in elderly women with and without a history of falls. *Aging Clin Exp Res* 26(2): 213-20, 2014.

その他 著書 1 件、論文 39 件、国際学会発表 5 件、国内学会発表多数

I 専門分野

民俗学、文化人類学

II キーワード

伝統社会、鍛冶屋、職人、地場産業、変化と生存

III 研究テーマ

1. 日本の鍛冶屋の変化と生存
2. 知多半島の地場産業の歴史と現状

IV 研究紹介

1. かつて鍛冶屋は、ひとつの地域に1軒、あるいはひとつの集落に1軒といわれるほど数多く存在し、農具や山林道具、漁具、工具類などの仕事の道具から、包丁などの家庭の道具に至るまでさまざまな鉄製品を製作・修理し、人びとの暮らしに深い関わりを持つ身近な存在でした。ところが、戦後の社会状況の変化にともなって鍛冶屋の存在価値は薄れ、減少の一途をたどり、現在ではその存在が危ぶまれるまでに数を減らし、すっかり遠い存在になってしまいました。しかし、そうした状況にあっても、現在も営業を続ける鍛冶屋は確かに存在し、その中には今後も順調に営業を続けて行くであろうと予想される鍛冶屋もあります。そうした今を生きる鍛冶屋に着目して、実際に足を運び、お話を伺って、多くの鍛冶屋が姿を消す中でどのようにして生き残ってきたのか、そして今後どのようにして生き残っていくのかについて調査研究しています。
2. 2014年の4月に愛知県に遊び始めたばかりなので、知多半島はもちろん、愛知県のことも分からないことばかりで、まだまだ勉強中で、「調査研究」のレベルまではいっていません。ただ、この知多半島をはじめとする愛知県内には興味関心を惹きつける魅力的なものがたくさんあるので、大野鍛冶や関（岐阜県ですが・・・）の鍛冶屋さんについて勉強したり、知多市歴史民俗博物館で小学生にまじって知多の木綿について学んだり、東海市を歩いてグリーンマップを作ってみたり、半田市の定期市（六斎市）を巡ってみたり、豊田市のあすけで「聞き書き隊」に参加してお年寄りからお話をうかがったり、といろいろ活動しています。これからもいろいろな活動に首を突っ込んでいきたいと考えていますので、講師としてではなく、メンバーとしてお誘いいただければ幸いです。

【参考】

■プロフィール：宮城県富谷町生まれ、北海道大学文学部卒業、2014年より星城大学講師

■担当科目：日本文化論、社会学、文化人類学

■社会的活動：北海道地域文化学会学会誌編集委員

■主な著書・論文など

- ・“The Survival and Symbiosis of Blacksmiths in Bishnupur, India.” *Continuity, Symbiosis, and the Mind in Traditional Cultures of Modern Societies*, 2010, 分担執筆
- ・「道具と身体インターフェイスとしての機能する鍛冶屋」2014年、北海道民族学会『北海道民族学』第10号、単著
- ・「経済自由化以降の現代インド社会を生きる鉄鍛冶業の戦略と共生」2013年、日本文化人類学会『文化人類学』第78巻3号、単著
- ・『生き残れ！日本の職人文化—日本の鍛冶屋をフィールドワーク』2013年、風響社、単著

I 専門分野

運動老年学、健康支援、介護予防、作業療法学

II キーワード

高齢者、運動、体力、認知機能

III 研究テーマ

1. 地域における高齢者の健康づくりに関する研究
2. 高齢者の身体機能と認知機能に関する研究

IV 研究紹介

1. 加齢に伴い身体機能が低下し、そのことが生活障害や転倒の原因になることが明らかとなっています。そのため、運動による取り組みが行われています。

私は、地域での公民館などを利用した集団で取り組める運動の効果について研究をしています。これまで東海市、東海市社会福祉協議会と協力し運動教室を実施し、教室での効果は示されてきています。現在は教室終了後の対象者の身体機能や生活状況、効果に影響する要因などについて検討しています。

2. 高齢者は、身体機能のみではなく認知機能も低下することが明らかとなっています。認知機能の低下を予測するのは、認知機能検査や生活状況調査などが主となっています。しかし、近年では、身体機能と認知機能に関連があることも示されています。このことから、運動教室などにおける身体機能測定を通して認知機能の判定や低下の予測ができないか検討しています。

【参考】

■プロフィール：沖縄県那覇市生まれ、平成医療専門学院作業療学科卒業、名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科博士前期課程修了（修士：生体情報）、2003 年より星城大学リハビリテーション学部作業療法学専攻教勤務

■担当科目：運動学Ⅰ・Ⅱ、運動学実習、作業療法評価学実習、身体障害作業療法学Ⅱ、地域作業療法学演習、作業療法学研究法演習

■社会的活動：知多市障害者自立支援認定審査会委員、愛知県作業療法士会現職者研修委員長

■主な著書・論文など

- ・高齢者を対象に家庭型を併用した地域型レジスタンス運動の体力への効果、臨床作業療法 5, p549-555, 2012.
- ・転倒予防のためのバランス運動の理論と実際、有限会社ナップ、2010 年、共著.
- ・高齢女性における下肢レジスタンス運動とバランス運動の体力への効果. 星城大学リハビリテーション・システム開発研究所研究紀要 4, p67-74、2009 年、共著

I 専門分野

作業療法学、脳卒中後運動麻痺、上肢運動

II キーワード

上肢、脳卒中、バイオメカニクス

III 研究テーマ

1. 脳卒中片麻痺患者の上肢における静脈還流
2. 日常生活における上肢の運動特性

IV 研究紹介

1. 脳卒中後、運動麻痺によって四肢が腫れる（浮腫）ことがあります。肢が腫れると、痛みや運動の困難さを招くことがありますので、浮腫を取り除くことが必要です。しかしながら、浮腫を取り除く方策の解決には至っていません。浮腫の原因の 1 つとして静脈還流量の減少が挙げられます。本研究では、静脈還流に着目し、静脈還流と浮腫の関係性を解明すること、ならびに麻痺していない肢を運動することで、麻痺している肢の静脈還流を増加させる方策の開発に挑みます。
2. 日常生活を送る上で、上肢はほとんど全ての活動で使用するため非常に大事な役割を担います。上肢を損傷すると、残念ながらこれまでと同じ動きにならないこともあります。その際には、完全な動きができなくとも活動を遂行するために必要な動きが獲得できれば良いと考えることもできます。しかし、上肢の各関節においてどの程度の動きがあれば活動を遂行できるのか分かりません。目安があれば、それを目標とした効率的な治療が展開できます。本研究では、活動遂行時の上肢運動（特に関節可動域）について明らかにし、医学・医療の発展に寄与します。

【参考】

- プロフィール: 平成医療専門学院作業療学科卒業、名古屋大学大学院医学系研究科博士後期課程修了。博士（リハビリテーション療法学）。岐阜中央病院、岐阜大学医学部附属病院リハビリテーション部を経て、2006 年から星城大学リハビリテーション学部勤務
- 担当科目: 運動学、身体障害作業療法学、作業療法評価学、等
- 社会的活動: 日本作業療法士協会教育部委員
- 主な著書・論文など
 - ・土屋智歩、窪優太、林浩之: 食事自立に向けた自助具作製により食事動作が改善した頸髄損傷患者。作業療法, 34, 670 - 677, 2015.
 - ・Hayashi Hiroyuki, Shimizu Hideki, Okumura Shoji, Miwa Kazuhiro: Necessary metacarpophalangeal joints range of motion to maintain hand function. Hong Kong Journal of Occupational Therapy, 24, 51-55, 2014.
 - ・Hayashi Hiroyuki, Shimizu Hideki: What ranges of metacarpophalangeal joint flexion and extension are necessary to perform activities without difficulty?. Hand Therapy, 18, 103-108, 2013.
 - ・Hayashi Hiroyuki, Shimizu Hideki: Essential motion of metacarpophalangeal joints during activities of daily living. Journal of Hand therapy, 26, 69-74, 2013.
 - ・津坂翠、梅本吉昭、林浩之、長谷川龍一: 脳血管障害等の患者が自宅退院するために必要な日常生活活動。作業療法, 32, 256 - 261, 2013.
 - ・Hayashi Hiroyuki, Uchiya Jun: A 3-year follow-up study on the alternating use of static splints after metacarpophalangeal joint arthroplasty in a patient with rheumatoid arthritis. Asian journal of Occupational Therapy, 9, 1-5, 2011.

I 専門分野

健康支援学

II キーワード

地域在住高齢者、抑うつ予防、身体活動量、運動導入・継続

III 研究テーマ

1. 地域在住高齢者の身体活動促進に向けた研究
2. 高齢期における運動導入・継続に関する研究

IV 研究紹介

1. 身体活動量の増加により循環器疾患、糖尿病といった生活習慣病の発症リスクを低減できることが多くの先行研究によって示されています。さらに、「健康づくりのための身体活動指針 2013」では、上記の生活習慣病に加え、悪性腫瘍（ガン）や認知症への効果が追記されました。このように、身体活動の重要性は明確である一方、先進国を中心に人々の身体活動量は減少の一途を辿っています。こうした状況は、我が国でも同様です。本研究では、介護予防、健康寿命の延伸を目標として、高齢者の身体活動に影響を与える要因を分析し、高齢者の身体活動促進にむけた支援方法を明らかにします。
2. 長寿高齢社会の我が国では、健康寿命延伸に向け、運動習慣の獲得にむけた支援策が求められています。近年では、習慣的に運動を行う高齢者が増加傾向にあるものの、1ヶ月の運動回数が1-3日以下という者も依然多く、全体の1/4を占めています。そのため、高齢者への運動導入や習慣化に必要な要素を検討し、誰もが行いやすく続けやすい健康づくりを提案したいと考えています。

【参考】

■プロフィール：愛知県名古屋市生まれ、名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科博士前期課程修了（修士：生体情報）、2016年より星城大学リハビリテーション学部作業療法学専攻助教

■担当科目：基礎作業学実習、日常生活活動学実習、作業療法評価学

■社会的活動：NPO法人アクティブエイジング研究会会員

■主な著書・論文など

- Daisuke Kimura, Tokunori Takeda, Tomoko Ohura, Aiko Imai. Evaluation of Facilitative Factors for the prevention of cognitive decline: A three-year cohort study of community intervention. Psychogeriatrics. (in Press)
- 今井あい子, 加藤芳司, 竹田徳則, 大浦智子, 北林由紀子, 山本和江, 真田樹義. 地域開催型ラジオ体操活動が高齢者の身体・心理社会面にもたらす効果. 作業療法. (34) 393-402. 2015.
- 船渡絵梨香, 津山努, 今井あい子, 大浦智子. 訪問リハビリテーション利用者の主介護者における主観的介護負担感とその関連要因の検討. 愛知作業療法. (22) 3-8. 2014.
- 大浦智子, 竹田徳則, 藤田高史, 古澤麻衣, 木村大介, 富山直輝, 林浩之, 飯塚照史, 坂井一也, 今井あい子. 客観的臨床能力試験(OSCE)場面のビデオ・フィードバックによる臨床実習前教育の取り組み. 作業療法. (33) 181-190. 2014.
- Nobuo Takeshima, Mohammad M. Islam, Michael E. Rogers, Nicole L. Rogers, Naoko Sengoku, Daisuke Koizumi, Yukiko Kitabayashi, Aiko Imai, Aiko Naruse. Effects of Nordic Walking compared to Conventional Walking and Band-based Resistance Exercise on Fitness in Older Adults. J Sports Sci & Med. (12) 422-430. 2013.

I 専門分野

保健医療福祉学、理学療法学

II キーワード

健康増進

III 研究テーマ

1. 積極的な運動参加が心身に及ぼす影響について

IV 研究紹介

1. 近年、健康増進を目的として、自発的かつ積極的な活動を行う機会が増えてきています。しかし、運動が心身に好影響を与えることが一般市民にも浸透されつつありますが、安全で適切な運動強度について調査をした報告はまだ少ないです。そのため私達は、運動がもたらす心理面における不安の軽減効果や身体面における筋骨格器系に対する影響を検証しております。

そのため、老若男女問わず、「運動」という観点から、市民の積極的健康支援に関わって行きたいと考えております。

私の研究や活動に関心をお持ちいただき、協働の事業をお考えの場合は、お気軽にお問い合わせください。

【参考】

■プロフィール：愛知県豊明市生まれ、国際医療福祉大学保健医療学部卒業、介護老人保健施設椿寿荘、浜松医科大学医学部附属病院にて理学療法士として勤務。2009年から星城大学リハビリテーション学部助教

■担当科目：実習関連

■社会的活動：日本理学療法士協会会員、東海スポーツ傷害研究会会員、日本股関節学会会員

■主な著書・論文など

- ・健常若年者における 10km マラソン完走者の身体特性の調査。第 20 回愛知県理学療法学会誌
- ・前十字靱帯再建術後のスポーツ復帰に関係する因子の検討(第 2 報) 術後 6 ヶ月でスポーツ復帰基準を満たさなかった群に再指導を実施した結果の検討

I 専門分野

理学療法学、健康支援学

II キーワード

膝蓋骨可動性評価、脳血管障害者、Myokine、臨床実習

III 研究テーマ

1. 膝蓋骨可動性評価
2. 脳血管障害者における運動効果
3. 理学療法士教育

IV 研究紹介

1. 膝蓋骨の可動性評価は確立されたものではありません。しかし、臨床では膝蓋骨可動性評価は重要であると多くの臨床家は認識しています。膝蓋骨可動性の評価手法、基準値等の確立を行い、より科学的な治療に繋がる研究を実施しています。
2. 脳血管障害者は、麻痺があるため限られた運動しか行えません。また、その限られた運動においても健常者のような明確な強度の指標はありません。我々は、脳血管障害者における運動の効果を、Interleukin-6 (IL-6)を始めとする Myokine の観点から解明すべく研究に取り組んでいます。また、今後は脳血管障害者のみならず高齢者においても簡単に、長く続けられる運動の効果検証に取り組みたいと考えています。
3. 臨床実習は、実践力を持つ理学療法士の輩出に欠かせない卒前教育です。限られた期間で社会に求められる理学療法士を育成するために、効果的・効率的な実習形態を確立する必要があります。それらを客観的指標に基づいて検証を行っています。

【参考】

■プロフィール：岐阜県生まれ、星城大学リハビリテーション学部卒業、理学療法士、社会医療法人黎明会北出病院勤務、和歌山県立医科大学医学研究科修士課程修了（医科学）、和歌山県立医科大学医学研究科博士課程に在籍、2013年から星城大学リハビリテーション学部勤務

■担当科目：「医療学入門」/「生理学実習」/「理学療法技術演習Ⅰ・Ⅱ」/
「運動器障害理学療法学実習」/「内部障害理学療法学実習」等の補助

■社会的活動：日本理学療法士協会会員、愛知県理学療法士協会会員、日本体質医学会会員、日本 RA の

リハビリ研究会会員、星城大学リハビリテーション研究会代表世話人、星城大学同窓会理事

■主な著書・論文など

- ・ Stable plasma interleukin-6 levels 40-min after walking exercise in patients with cerebrovascular accidents: 日本体質医学会雑誌. 75 (1): 18-25, 2013. 筆頭論文.
- ・ Age-related sex differences in erector spinae muscle endurance using surface electromyographic power spectral analysis in healthy humans. Spine J. 13(12): 1928-33. 2013. 共著.
- ・ 装具の選択が不適切であったため歩行獲得に難渋した片麻痺者に対する下肢装具の再検討. 脳血管障害への下肢装具カンファレンス ; 1 : 16-17, 2012. 共著.
- ・ 関節リウマチに右大腿骨転子部骨折・左第 3 趾切断を呈した症例に対し、生活環境を工夫することにより早期に病棟内 ADL を獲得した一例 : 日本 RA のリハビリ研究会誌. 24 : 72-73, 2010. 筆頭論文.
- ・ 理学療法実習における理学療法実習生の身体的・精神的活動量の変化. 和歌山県理学療法士学会大会学会誌. 21 : 10-11, 2008. 筆頭論文.

I 専門分野

理学療法学

II キーワード

高齢者、運動機能、姿勢、変形性膝関節症、糖尿病、呼吸、起立性低血圧

III 研究テーマ

1. 変形性膝関節症とその合併症の1つである糖尿病の両疾患の予防を目的とした運動介入方法の検討
2. Step 運動機能付 Tilt table の生理学的特徴と効果の検討

IV 研究紹介

1. 変形性膝関節症の予防・進行防止と糖尿病の予防を同時に達成できる運動、つまり、膝関節内反モーメント減少と酸素摂取量増加の両方の効果を持つ日常生活介入プログラムとして、腹部引き込み運動を取り入れた歩行を主とし、股関節周囲筋の筋活動を増加させる Hip joint dominant ADL を組み合わせることが効果的であると考えます。本研究では、これらの動作時の動作解析・酸素摂取量の測定を実施し、各動作の特徴を明らかにしたいと考えています。
2. 臨床では、立位・歩行が不可能である方、介助下においても数回の立位や平行棒内片道歩行で疲労する方に対して重力負荷時間を増やすため Tilt table での起立練習が実施されることもありますが、起立性低血圧を来すと長時間、頻回の実施が難しく、また静的で関節運動がないことも問題であると考えます。そこで、Step 運動機能付 Tilt table (STT) の開発という着想に至り、試作機を作製して健常若年者に実施したところ、通常の Tilt table に比較し血圧低下が少なく、めまい等の自覚症状が出現しないこと、下肢屈伸運動速度によって血圧改善に差がある傾向を確認しました。本研究では、高齢者への応用に向け STT 使用時の生理学的特徴と効果的な設定を明らかにしたいと考えています。

【参考】

- プロフィール：愛知県名古屋市生まれ、名古屋大学医学部保健学科理学療法学専攻卒業、吉備国際大学大学院（通信制）保健科学研究科理学療法学専攻修了、2014 年より星城大学助手
- 担当科目：理学療法学評価診断学演習・実習、理学療法技術演習Ⅰ・Ⅱ、内部障害理学療法学実習、運動療法学実習、運動器障害理学療法学実習等の補助
- 社会的活動：NPO 法人愛知県理学療法学会学術誌部員
- 主な著書・論文など
 - ・ Ota S, Goto H, Noda Y, Fujita R, Matsui Y. Relationship between standing postural alignments and physical function among elderly women using day service centers in Japan. *J Back Musculoskelet Rehabil* 28(1):111-117, 2015.
 - ・ Matsui Y, Fujita R, Harada A, Sakurai T, Nemoto T, Noda N, Toba K. Association of grip strength and related indices with independence of activities of daily living in older adults, investigated by a newly-developed grip strength measuring device. *Geriatr Gerontol Int* 14 (Suppl 2):77-86, 2014.
 - ・ Ota S, Goto H, Fujita R, Haruta M, Noda Y, Tamakoshi K. Application of pole walking to day service centers for use by community-dwelling frail elderly people. *Int J Gerontol* 8:6-11, 2014.
 - ・ Matsui Y, Fujita R, Harada A, Sakurai T, Nemoto T, Noda N, Toba K. A new grip-strength measuring device for detailed evaluation of muscle contraction among the elderly. *J Frailty Aging* 3(3):142-147, 2014.

経営学部

I 専門分野

教育カウンセリング、教育心理学、教育社会学、家族関係論、キャリア教育論

II キーワード

育てるカウンセリング、キャリア形成、母子・父子関係、自己・他者理解、コミュニケーションスキル

III 研究テーマ

1. 思春期クライシス
2. 母子関係・父子関係
3. 予防的開発的学校カウンセリング
4. ジェンダーと進路指導
5. 子育て支援

IV 研究紹介

1. 愛着関係の有無と思春期クライシス：各発達段階に於ける愛着関係のありようが如何に人格形成に関わるのか、とりわけ思春期通過との関連性を、面接による聞き取りを通して調査している。
2. 教育によるカウンセリングのあり方：カウンセリングの思想と手法による学級経営・生徒指導・授業運営への対応により、「教師」による学校カウンセリングの在り方を調査研究している。
3. アイデンティティ形成とキャリア教育：「描画法」と「来談者中心カウンセリング」の組み合わせにより、語りに寄り添い続けることで、思春期に於けるキャリア意識確立のための手法を提示した。

【参考】

■プロフィール：上級教育カウンセラー、ガイダンスカウンセラー・京都市出身、京都大学教育学部研修員修了、京都市教育委員会教育相談総合センター指導主事カウンセラーを経て、2007年から星城大学経営学部教授、京都市子育て支援総合センタースーパーバイザー、家庭裁判所調停委員、星城高校スクールカウンセラー

■担当科目：教育相談、生徒指導論、教育心理、女性経営者論； 学生相談室室長、カウンセラー

■所属学会：日本教育カウンセリング学会（理事）、日本教育心理学会、日本労務学会、日本地域資源開発経営学会（理事）、立命館大学日本文学会

■社会的活動：家庭裁判所調停委員、日本教育カウンセリング協会 スーパーバイザー、京都市学校教育相談研究会顧問

■主要著書・論文

- ・『“育てるカウンセリング”による教室対応全書』2003年、図書文化社、共著
- ・「告発から解放へ・生育歴に悩む母親の子育て相談」2003年、京都市『研究紀要』、単著
- ・「“よい子”の不登校を巡って」2004年、京都市教育相談総合センター『研究紀要』単著
- ・「進路選択と決定に寄り添って」2005年、同『研究紀要』単著
- ・「心に響く“キャリアカウンセリング”のための一試行」2006年、同『研究紀要』、単著
- ・「父が気付けば：学校・家庭・専門機関の連携」2007年、同『研究紀要』、単著
- ・「女子中学生に見る、職業意識の形成」2008年、同『研究紀要』、単著
- ・「孤独な子ども・親・家族」2008年、家庭裁判所会報6月号所収、単著
- ・「思春期におけるキャリア教育の進め方：カウンセリングの理論と技法によるアプローチ」2011年、星城大学『人文研究論叢』第7号、単著
- ・「カウンセリングによるキャリア教育の試み：進路に悩む高校生の語りに同伴して」2012年、星城大学『人文研究論叢』第7号、単著
- ・「虐待の連鎖を断ち切って：語ることで聴くことの力」2013年、星城大学『人文研究論叢』第7号、単著
- ・学会賞：「サイエンティストプラクティショナー」2013年、日本教育カウンセリング学会
- ・「男女共同参画社会」 今・昔」2016年、『中部経済新聞』、単著

I 専門分野

経営学、エネルギー・産業政策、経営戦略論

II 研究テーマ

エネルギー・産業政策

III 研究紹介

1. 日本のエネルギー政策

国益、グローバル益を考慮すると、短中期的には、安定した天然ガス供給システムの構築 (LNG とガスパイプラインの統合)、中長期的には本格的な再生エネルギーを中心としたスマートコミュニティの導入が必要となる。多面的視点から戦略を構築する必要がある。

2. スマートコミュニティ実現に向けて

国益、グローバル益の観点から戦略的に対応していく必要がある。国際標準化、社会インフラ、社会システムとしてのスマートコミュニティ、国の支援の在り方、産業構造等多岐にわたって総合的に検討していく必要がある。

3. エネルギー市場

現在の電力・ガス業界等の枠組みを超えた、世界に通用する、新しい時代に適応したエネルギー市場について検討していく必要がある。2020 年には電力会社の発送電分離、2022 年には都市ガス会社の導管分離が実施される。原子力・再生可能エネルギー政策と併せて、最適な市場を形成する必要がある。

【参考】

■プロフィール: 三重県津市出身、早稲田大学理工学部卒業、名古屋大学大学院経済学研究科博士課程修了 (経済学博士)、(財)国際超電導産業技術センター調査企画部主任研究員、中部電力株式会社 四日市・緑電力センター所長、知的財産グループ長等歴任、2009 年から星城大学経営学部教授、2010 年から独立行政法人・新エネルギー産業技術総合開発機構 (NEDO) 技術委員、北東アジアガス&パイプラインフォーラムメンバー、2013 年から(社)日本プロジェクト産業協議会・天然ガスインフラ整備活用委員会委員

■担当科目: 経営学原理、コーポレート・ガバナンス、経営組織論

■社会的活動: 日本経済政策学会、日本経営学会、組織学会、公益事業学会、日本エネルギー学会、電気学会、国際戦略経営研究学会等、日本エネルギー経済研究所学会員、NEDO スマートコミュニティ・アライアンスメンバー、NEDO ピュアレビューアー、東海市緑化審議会会長等

■主な著書・論文など

- ・「規制緩和下における電力会社の戦略」2005 年『日本経営学会誌』第 14 号、単著
- ・「電力会社の多角化戦略」2006 年『日本経営学会誌』第 18 号、単著
- ・「電力会社の通信事業戦略」2008 年『経済科学』55 巻、単著
- ・「持続的な競争優位の確保に向けた都市ガス会社の戦略ー規制緩和への対応から国際展開へ」2008 年、『公益事業研究』60 巻第 1 号、単著
- ・「総合エネルギー企業を目指した電力会社の戦略ーグローバル戦略構築に向けてー」2009 年『公益事業研究』60 巻第 4 号、単著
- ・「エネルギー企業の経営」2010 年『公益事業研究』61 巻第 4 号、単著
- ・「スマートコミュニティ実現に向けて」2011 年『公益事業研究』63 巻第 1 号、単著
- ・「天然ガスと再生可能エネルギーを中心としたエネルギー活用と今後の電力会社の企業形態」2014 年『公益事業研究』65 巻第 3 号、単著

I 専門分野

国際関係学、文化経済論、コンテンツ産業論

II キーワード

娯楽産業、産業集積、テレビゲーム

III 研究テーマ

1. 娯楽の消費場面の変遷（テレビゲーム、パチンコ等）に関する研究
2. コンテンツ産業における国際競争力の源泉に関する研究

IV 研究紹介

1. 4 マス時代と呼ばれる、テレビ・ラジオ・新聞・雑誌が情報流通の中核を担った時代は、インターネットの登場によって大きく変容しつつあります。これにより、文化や芸術、娯楽に対する接触機会も 20 世紀とは異なる経路をたどることとなりました。この研究では、日本における大衆的な娯楽として独自の発展形態を遂げてきたテレビゲームとパチンコを題材に、選択的消費が進む娯楽市場の歴史的変遷から、その将来像を読み解くことが課題です。
2. 産業振興を実現する経路はケースバイケースですが、一つの方法論に、地方が独自に蓄積してきた知的資源の活用があります。私が専門にしてきた北欧では、10 万人程度の規模の都市で次々とベンチャー企業を生み出し、世界でも有数の産業集積を実現させている地域があります。このような産業集積はどのような取り組みによって可能になるのか？をテレビゲーム産業を具体例として研究しています。また、もうひとつのアプローチとして、特定の地方ではなく、動画サイトなどの消費者生成メディア（CGM）を活用する方法もありえます。クリエイター発・ユーザー発のコンテンツが蓄積することが娯楽産業のありようをどう変えつつあるのかを、各国比較を通じて研究しています。

【参考】

■プロフィール：静岡県三島市生まれ、立命館大学大学院国際関係学研究科 博士課程修了

■担当科目：環境情報論、環境経営論、日本経済論

■社会的活動：東海市行政改革推進委員会、東浦町社会教育委員ほか

■主な著書・論文など

<論文>

- ・「グローバリゼーションのなかのビデオゲーム：フィンランドにおけるゲーム産業振興の現状と課題」、『国際言語文化研究 24(2)』2012 年、単著
- ・「デジタルゲームを活用したシリアスゲームによる経営学教育実践の試行」、『日本情報経営学会第 61 回大会予稿集 61』2010 年、共著
- ・「e-University における教学用 ICT システムの支援ツール」『星城大学経営学部研究紀要 8』2009 年、単著
- ・“Pachinko: A game studies perspective”, Kinephanos (2015), 共著、in printing.

<招待講演・口頭発表>

- ・“Japanese game software industry for mobilephone/smartphone.” フィンランド国家技術庁 (Learning Solutions programme) セミナー、2012/02/27
- ・“General situation of digital serious games in Japan” ヘルシンキ大学 CICERO ラーニング特別セミナー、2012/02/28
- ・“Pachinko: Evolution in parlour and in video game.” (2015), CGSA 2015 Annual Conference、2015/06/04
- ・“Pachinko: Adaptation in the Game Industry”, (2013) International Conference on Japan Game Studies、2013/05/25

I 専門分野

労働経済学、欧州経済論、企業経営演習

II 研究テーマ

1. 中小企業経営者研修
2. 欧州経済・企業論

III 研究紹介

1. 経済のグローバル化が急速に進展する今日、世界的な規模で企業間競争が進行している。世界的な規模で勝ち組企業が生まれる一方で、市場競争に敗れ淘汰される企業も生まれている。このような厳しい競争環境を勝ち抜くためには、従業員一人一人に経営者としての能力が求められている。経営者として必要な能力を短期間にかつシステムティックに養成するため、経営大学院等で使われる経営シミュレーションソフトを用いた企業研修を実施している。
2. 欧州進出企業従業員に対する語学講習を含む研修会の実施
3. ドイツ、フランス企業の多国籍展開に関する研究

【参考】

■プロフィール: 愛知県出身、大阪大学大学院国際公共政策研究科博士後期課程修了 博士(国際公共政策)、Kawai Deutschland GmbH Prokurist, Kawai Nederland Managing Director, Kawai UK Managing Director を経て、2001 年 4 月より星城大学経営学部教授 愛知大学経営学部講師 (ユーロビジネス論担当)

■担当科目: マネジリアルエコノミクス (経営経済学)、国際労働、マネジリアルエコノミクス、直接投資論

■社会的活動: 日仏経営学会会員、国際経済学会会員、翠松園陶芸記念館理事

■主な著書・論文など

「フランス労働市場における賃金構造の変化と内部労働市場」「フランスホワイトカラーの賃金構造の変化」「フランス大企業におけるホワイトカラーの昇進」「年齢・賃金プロファイルの再検討」「フランス大企業における部長への昇進」「The Promotion of White-Collar Workers in Large French Firms」「昇進メカニズムの再検討」「日系製造業の対仏直接投資と撤退」「拡大 EU に伴う労働力移動と価格形成」「労働力移動の自由化と頭脳流出」「中国の EU 外交とアフリカ」「中小企業の海外進出と人材育成」「欧州中小企業のグローバル戦略」「経済危機と欧州議会選挙」「フランス企業経営者のリーダーシップ」「Les déterminants des investissements directs et des disinvestissements des entreprises japonaises en Europe au cours des vingt dernières années」

I 専門分野

教育制度論、教育課程論、教職論、教育原理、特別支援教育

II キーワード

特別支援教育、インクルーシブ教育システム、ユニバーサルデザイン、合理的配慮、KJ法
知的障害特別支援学校学習指導要領、文部科学省著作本

III 研究テーマ

1. 教職課程の授業内容、方法等について実践を通して検証し、教員として身に付けるべき専門性を明らかにする。
2. 大学における学びの「合理的配慮」に関して、実践を通して考察する。

IV 研究紹介

1. 教員をめざす学生と共に学ぶ日々ですが、ただ教職の授業を進めるというのではなく、学生一人一人が教員として何を身に付けるのか、どんな力をつけていくのかを具体的に検証していきたいと思っています。それには、時代背景も含めて現場がどのような教員を求めているのかを知ることや学生の意識を知る必要があります。アンケート調査等を通して現場を知り、授業という形にして学生に返していきたいと考えます。学生の夢を形にする授業をめざしていけたらと思っています。
2. 平成 28 年 4 月、障害者差別解消法が施行されました。この法律は、障害のある人びとへの差別をなくすことで、障害のある人もない人も共に生きる社会をつくることをめざしています。合理的配慮とは、「障害者から何らかの助けを求める意思の表明があった場合、過度な負担になり過ぎない範囲で、社会的障壁を取り除くために必要な便宜のことである。」と書かれています。が、「障害者」と一括りにするのではなく、困り感を抱えている一人一人の人、学生が配慮を受け、自分らしい学生生活を送れるようにと願うものです。そのために、今、何が必要なのか、何ができるのかということについて考えていきたいと思っています。

【参考】

■プロフィール：愛知県江南市生まれ、愛知教育大学教育学部特殊教育科肢体不自由教員養成課程卒業、愛知県立佐織特別支援学校校長、愛知県立名古屋特別支援学校校長を経て 2016 年より星城大学教授

■担当科目：教育制度論、教育原理、教職論、教育方法論、ボランティア演習、総合演習等

■社会的活動：自閉症スペクトラム学会会員、日本LD学会会員、日本特殊教育学会会員

■主な著書・論文など

- ・『知的障害特別支援学校の『家庭』指導』、ジアース教育新社、監修、平成 27 年
- ・『未来へつなぐキャリア教育～愛知県肢体不自由特別支援学校 9 校の取組～』、ジアース教育新社、平成 28 年
- ・『特別支援学校のセンター的機能 ―全国の特徴ある 30 校の実践事例集―』、ジアース教育新社、共著、平成 23 年
- ・『さんすう☆さんすう☆☆さんすう☆☆☆ 教科書解説』、文部科学省、委員執筆、平成 23 年
- ・『特別支援教育 改訂指導要録の実際と文例集』、明治図書、共著、平成 22 年
- ・『新学習指導要領 ポイントと授業作り特別支援教育』、東洋館出版、共著、平成 22 年
- ・『特別支援学校 教育要領・学習指導要領』、文部科学省、作成協力者、平成 21 年
- ・『特別支援学校学習指導要領解説 総則等編（幼稚園・小学部・中学部）』、文部科学省、協力者執筆、平成 21 年
- ・『障害のある子のための算数・数学 数と計算』及び『障害のある子のための算数・数学 量と測定』、東洋館出版、共著、平成 16 年

I 専門分野

情報工学、経営工学

II キーワード

IT 経営、要求・要件定義、IT コーディネータ制度、中小企業、IT 投資

III 研究テーマ

1. 経営と IT 技術をつなぐコンサルティング
2. IT コーディネータの実践的活用法

IV 研究紹介

1. IT 経営を進める上で必要となる経営サイドからの要求定義と、システム化に必要となる要件定義をどのように取り纏めるかは、その情報システム開発の成否に直結する重要なプロセスです。本テーマでは、この要求・要件定義を効率的に取り纏めるための、経営と IT 技術をつなぐコンサルティングについて、具体的なシステムを取り上げて事例研究を行うものです。
2. 経済産業省が 2001 年からスタートした IT コーディネータ制度は、その制度の定着と合わせ IT コーディネータの資格保有者も約 6,500 人に達しています。また、全国各地には活動拠点となる NPO 法人も多数発足して、地域での密着した活動が展開されています。一方、中小企業を取り巻く経営環境は急速に変化してきており、この IT コーディネータ制度を十分活用できていない現状があります。本テーマでは、こうした中小企業にとって真に経営に役立つ IT 投資を推進するための、IT コーディネータの実践的活用法について研究するものです。

※中小企業の IT 化推進や IT 経営に関心をお持ちの方は、気軽にお問い合わせ下さい。

【参考】

- プロフィール：岐阜県出身、福井大学大学院工学研究科博士後期課程修了。日立エンジニアリング（株）ソフト開発システム部長、同情報システム本部シニアエキスパート、福井高専教授を経て、2011 年から星城大学教授。博士（工学）、技術士（情報工学・経営工学・総合技術監理）。
- 担当科目：e ビジネス論、電子決済論、経営情報論、ビジネスモデル論、IT 経営実践セミナーなど
- 社会的活動：日立技術士会広報委員、情報処理学会北陸支部評議員、福井県内各種委嘱委員、東海市委嘱委員などに従事。日立技術士会、日本技術士会、情報処理学会、電気学会に所属。
- 主な著書・論文など
 - ・「統計的品質管理」2014 年、オーム社編『技術士ハンドブック第 2 版』5・5 章、単著
 - ・"Kana-to-kanji conversion method using Markov chain model of words in bunsetsu" *Proc. 2010 4th International Universal Communication Symposium*, 2010, 共著
 - ・「かな単語マルコフ連鎖モデルを用いたかな漢字変換法」2010 年、電気学会編『論文誌 C』130 巻 6 号、共著
 - ・"An Evaluation of New Method to Convert Non-segmented kana Strings to kanji-kana Strings Using Markov Chain Model" *Proc. International Conference on Electrical Engineering 2008*, 2008, 共著
 - ・「統計的品質管理」2006 年、オーム社編『技術士ハンドブック第 1 版』5・4 章、単著
 - ・「IT 専門家を徹底活用」2003 年、茨城新聞社編『元気の出る中小企業経営』第 2 章 4 節、単著
- その他
 - ・関連保有資格：情報処理技術者（第一種・特種）、ITC 協会認定 IT コーディネータ、経営品質協議会認定セルフアセッサー
 - ・JETRO 活動：1997 年度輸入商品発掘専門家（ソフトウェア）、2002～2003 年度国際テクノビジネスフォーラム・コーディネータ（IT 分野）

I 専門分野

保健体育科教育、体育行政論、体育・スポーツ史

II キーワード

保健体育科教育、体育行政、地域スポーツ、教職課程

III 研究テーマ

1. 児童生徒一人一人の個性、能力に応じた保健体育科教育の指導法
2. 地域の活性化をめざした地域スポーツのあり方

IV 研究紹介

1. 「生きる力」を育むことを目指す学習指導要領は、改定された教育基本法や学校基本法の教育理念を踏まえ、基礎的・基本的な知識・技能の習得や思考力・判断力・表現力、学習意欲の育成を重視しています。これを踏まえた保健体育科の基本方針は、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育むことを目的としています。こうした方針に則り、保健体育科の指導法は、運動の特性や魅力をより明確にし、生涯にわたって運動に親しむことができるように個に応じた指導計画及び指導法の工夫や学習活動に生きる評価のあり方が求められます。

そこで、保健体育科教育の研究では、児童生徒一人一人の個を伸ばす指導のあり方に力点を置き、児童生徒の実態や課題意識を基に、児童生徒一人一人が課題に応じた練習方法や指導計画を立案できるための指導のあり方をきめ細かく追究したいと考えています。また、各運動種目に応じた学習形態のあり方や教材・教具の工夫など、より学校現場で生きる実践的な指導法の研究を進めていきます。

2. 多様化する社会、少子高齢化が進む現代社会において、スポーツ振興は、体力の向上や健康増進を求めるだけでなく、明るく豊かで活力に満ちた社会の形成に寄与する大きな意義あるものです。スポーツを通じた交流は、地域の一体感や活力を醸成し、人間関係の希薄化等の問題を抱える地域社会の再生にも繋がります。

そこで、体育行政では、様々な地域が抱える問題点を探り、地域スポーツと住民との関わりや地方公共団体におけるスポーツ行政のあり方を追求することを通して、それぞれの地域に適した地域スポーツのあり方を提示し、具現化することを目指しています。さらに、アスリートとして関わるだけでなく、マネジメントをする立場としての地域との関わり方をも模索していきながら地域の活性化を図る地域スポーツのあり方の研究を進めていきます。

【参考】

■プロフィール：愛知県西尾市生まれ、愛知教育大学教育学部保健体育科卒業、旧幡豆郡保健体育教科指導員、旧幡豆町教育委員派遣指導主事(スポーツ派遣)、旧吉良町教育委員会指導主事、愛知県教育委員会西三河教育事務所管理主事、旧吉良町立白浜小学校長、西尾市立一色中学校長、愛知県教育委員会西三河教育事務所教育支援指導員を経て、2016年より星城大学教授

■担当科目：保健科学、健康概論、スポーツ行政論、体育・スポーツ史、教育実習Ⅰ・Ⅱ、スポーツ実技Ⅰ(体操)、Ⅳ(ハンドボール)

■社会的活動：愛知県小中学校長会会計委員・同庶務委員、三河小中学校長会監査委員等を歴任。2016年；愛知県教育振興会評議員

I 専門分野

地域医療、医療安全、医療の質、医療経営・管理、医学教育、社会保障、健康教育、地域防災など

II キーワード

住民力養成、地産地消活性化、地域社会貢献活動、自治体支援など

III 研究テーマ

1. 自治体病院支援のための ERM 導入と SRI (社会貢献投資) システムの開発
2. 地域におけるメタボリックシンドローム対策調査・啓発に関する研究
3. 医療の質・安全管理モニタリング分析システム開発と検証
4. 地域支え合い体制づくりにおけるコミュニティ・デザイン構築と効果検証
5. 激甚災害時の共助・互助醸成推進に関する研究 ほか。

III 研究紹介

1. 自治体病院の 91.4% (2008 年) が赤字運営です。地域医療を担う自治体病院を継続運営するためには、内部統制は勿論、医療の質・安全管理について客観的評価を下すことのできる第三者評価機関設置、さらには、社会貢献投資 (SRI) 型自治体病院運営体制を提案したいと考えております。地域医療改革を具現化するためには、地域住民の方々の住民力 (住民の自治能力) なくして成立しません。地域の皆さんと一緒に取り組んでいきたいと思っております。
2. 医療の質・安全管理体制を客観的に評価するための医療の質・安全管理モニタリング分析ツールを開発し、各医療機関に対し分析評価のフィードバックを実施しています。自治体病院支援、地域健康増進普及活動、地域医療支援に関するご相談など積極的に対応します。

【参考】

■プロフィール: 福岡県遠賀郡岡垣町生まれ、小・中・高校時代を東海市で過ごす。九州大学大学院医学系学府医療経営・管理学専攻修士課程修了 (医療経営・管理学修士)。九州大学大学院医学系学府環境社会医学専攻医療システム学講座医学博士課程。各病院において医療安全管理部部長 (Patients Safety Manager) として医療事故調査、院内安全管理体制再構築)、公益財団法人日本医療機能評価機構、医療事故防止センター初代医療事故防止事業課長、病院長補佐 (特命任務: 院内質改善、経営改善等病院再建) 歴任。現在、兼職にて社会医療法人宏潤会大同病院医療安全管理顧問、医療経営学研究所客員研究員、自治体病院再建、医療機関 5 施設において医療経営・管理顧問、オブザーバー、九州保健福祉大学保健科学部非常勤講師、藤田保健衛生大学医学部客員教授など務める。

■担当科目: 地域医療学、医療環境教育学、患者安全管理学、医療オペレーションマネジメント論、医療管理学、医療システム論、クオリティ・マネジメント論、社会保障論、メディカル・リスクマネジメント論、医療・福祉支援学、医療安全管理学特論、組織管理学特論、健康支援学特論、ほか。

■所属学会: 医療の安全に関する研究会、日本医療経営学会、日本医療・病院管理学会、医療の質・安全学会、日本医学教育学会、日本医療教授システム学会、日本航空医療学会、日本医工学治療学会、日本医療機器学会、神戸医療経営学研究会、日本医学教育学会、(財)国家基本問題研究所、ほか。

■社会的活動: 医療の安全に関する研究会常任理事、東海病院管理学研究会世話人、日本医工学治療学会代議員、NGO 国際医療協力プロジェクト副理事長、社会医療法人宏潤会大同病院顧問、地域医療支援プロジェクト代表、日本ヒューマンファクター研究所研究主幹、医療経営学研究所客員研究員等。

■主な著書・論文など

・「知多半島の地域医療をみんなで考えよう！」series community medicine ,Step 連載, 5 月号 P73、8 月号 P67 ,11 月号 P73, 2 月号 P53

「医療におけるコミュニケーションと医療安全～患者安全管理の手法～」北野 達也、安全医学,Journal of Medical Safety,Vol.4(2):P17-P21,2007.11.30 ほか 103 編 (星城大学教員紹介参照)

I 専門分野

英文学、英国文化、時事英語

II キーワード

戯曲、英国文化、時事英語

III 研究テーマ

1. シェイクスピアの戯曲
2. 英国文化
3. 時事英語

IV 研究紹介

1. シェイクスピア悲劇の言語・技巧的研究
2. 英国文化研究
3. 時事英語

【参考】

■プロフィール：埼玉県八潮市生まれ、東京都立航空工業高等専門学校、愛知大学文学部卒業、愛知教育大学大学院修士課程修了、2003 年から星城大学経営学部教授

■担当科目：英語 I・II・III・IV、文学、時事英語、文化教養ゼミ I・II、キャリアサポート I・II、社会探索ゼミ

■社会的活動：日本シェイクスピア協会会員 リネッサンス研究所会員 片平会会員 愛知教育大学英語英文学会会員

■主な著書・論文など

- ・『田中幸穂先生退官記念論集』1988 年、桐原書店、共著
- ・『ことばの地平』1995 年、英宝社、共著
- ・『英語・英文学の風』1996 年 金星堂、共著
- ・『ことばのシンフォニー』1999 年 英宝社、共著
- ・『片平 50 周年記念論文集』2015 年 金星堂、共著
- ・「英国紅茶王・リプトン小伝」2003 年、名古屋明德短期大学紀要第 18 号、単著
- ・「シェイクスピア研究の手法」ー日本シェイクスピア協会の研究発表よりー、2007 年、星城大学人文論叢 第 3 号、単著
- ・「ロミオとジュリエット」映画化された 3 作品の比較（研究ノート）2010 年、星城大学人文研究論叢 第 6 号、単著

I 専門分野

コーポレートファイナンス、M&A、企業法

II キーワード

資本コスト、企業価値評価、価値関連性、CAPM、監査役監査

III 研究テーマ

1. 中小企業の企業価値向上への施策
2. サステナブル企業に向けた業務改革

IV 研究紹介

1. 【中小企業の潜在価値の顕在化】

中小企業に存在する価値資産の多くは、それを顕在化する手段の欠如から潜在化したままです。そうした価値を評価、顕在化する具体的な方策について検討します。また、資金調達から資本政策（ベンチャー投資資金、M&A活用の出口戦略など）まで財務面からの取り組みも検討します。

2. 【サステナブル企業にむけた業務改革】

日本には伝統的な技術や製法を有しながら拡大路線を取らず、200年以上の歴史を有する地域型企業が3,000社以上も存在します。そのビジネス・モデルは伝統という非効率性の堅守と、現代流の効率性を追及する経営手法の両立によるいわばサステナブル・モデルです。このモデルをいかにして築くか、具体的な業務フロー、管理手法について提言を行います。

上記の内容にご関心をお持ちいただきました場合は、お気軽にお問い合わせください。

【参考】

■プロフィール：大手情報通信会社にて国内外の投資関連業務に従事。経済学博士。星城大学経営学部准教授（2010～）。

■担当科目：会計学、電子会計、管理会計、簿記。

■主な著書・論文など

- ・「会計情報を用いた持続的利益の予測可能性」京都大学経済学会モノグラフ（発行番号 200909184）
- ・「会計情報と企業価値評価モデル」-OJモデルの構造と応用可能性 中央経済社、『企業会計』Vol.61 No.3 142～148頁

I 専門分野

英語、ビジネス英語、異文化理解

II キーワード

Computer Mediated Communication、英語会話、海外留学

III 研究テーマ

1. Interaction in Language Learning Situations
2. Behavior of College Students

IV 研究紹介

1. This project took place between two groups of students. One was a group of Japanese college students, the other a class of foreign students studying English as a second language at ELI at The University of Central Florida in America. The major goal of this project was for both groups of students to become familiar with using English as a means of communication. I wanted the students from both groups to get used to speaking in English and I wanted them to have the opportunity to develop friendships with students from other parts of the world.
2. I studied the behavior of college students upon return to Japan after a year overseas in an American institution of higher learning. Integrative motivation proves quite dominant at first and then instrumental motivation seems to be stronger as time passes.

【参考】

■プロフィール: フロリダ大学大学院英文学修士課程修了。

■担当科目: 英語、英語話術、ビジネス英語、異文化理解演習、海外ビジネスセミナー。その他授業外教育として、アメリカスタディツアー、海外留学支援、ゴルフ部顧問など。

■社会的活動: 東海市しあわせ村センター英語研究会、東海市勤労センター英語研究会、アメリカ語学研修に関する調査 (University of Central Florida, Lindenwood University, Seminole State College of Florida, My Stage Australia)、全国語学教育学会 会員、Computer Assisted Language Instruction Consortium 会員、東海市国際交流協会英語スピーチフェスティバル 審査委員長、第 40 回ライオンズインターハイスピーチコンテスト 審査・講演など。

■主な著書・論文など

- ・English as an International Language 1995/11 月 *Bulletin of Nagoya Meitoku Junior College* 第 9 号
- ・Difficulties of Foreign Students in U.S. Colleges 1997/3 月 *Bulletin of Nagoya Meitoku Junior College* 第 12 号
- ・Why Our Schools Fail to Teach Students 1999/3 月 *Bulletin of Nagoya Meitoku Junior College* 第 14 号
- ・The Role of Women in Chaucer's "The Knight's Tale" 2006/3 月 人文研究論叢 第 2 号
- ・The Effect of Motivation on Second Language Acquisition: A Presentation of Studies 2007/3 月 人文研究論叢 第 3 号
- ・A Short Biography of John Greenleaf Whittier. 2012/3 月 人文研究論叢 第 8 号

I 専門分野

まちづくり政策、地域ブランド開発、農商工連携支援、着地型観光

II 研究テーマ

1. 農商工連携等地域資源を活用した地域の活性化に関する研究
2. 中心市街地活性化とまちづくりに関する研究
3. 着地型観光のあり方に関する研究

III 研究紹介

1. 地域主権の時代が叫ばれ、地域資源の活用や地域ブランド振興などの施策が展開されていますが、現実には地域における産業の疲弊と衰退が急速に進行しています。地域には、農・漁・林業や製造業、商業等が存在しそれぞれの活性化に取り組んでいるものの、それらが地域として有機的に連携している例は少ない。中小企業者と農林漁業者が連携し、それぞれの経営資源を有効に活用して取組み地域活性化の可能性を探ることが重要だと考えている。
2. 郊外への商業集積が進み、都市の顔としての中心市街地の空洞化が進行し、まちの活力や賑わいが失われています。このままでは生活利便性の低下や、生活空間としての魅力の喪失、公共サービスの低下、都市を運営するコストの増大が引き起こされます。私は、地域プランナーとしてまちの生活拠点を再生し、次世代あるいは増加する高齢者を含めた多くの人々にとって住みよい快適なまちづくりとは何かを問い続け、その取り組みのあり方を実践・研究しています。全国のまちづくりの現状を調べに飛び回っていますのでそれぞれの地域に応じた活性化の取り組みの相談に応じることが出来ます。
3. 地域資源の再発見“宝探し”を基本に、地域ブランドの開発と観光ルートの再整備・組織化を行い、地域の活性化の一つとして観光客を地域に呼び込み（インバウンド政策）、その財源を基にサステナブルに地域を活性化させます。その際、地域の持つ歴史・文化資源は欠かすことが出来ない資源であり、最近では、手法の一つとして踊り・B級グルメ等のイベントやアニメ等のコンテンツも重要な研究要素である。

【参考】

■プロフィール：熊本県阿蘇地方生まれ、同志社大学大学院政策科学研究科修了、(株)西武百貨店、三井物産ロジスティクスマネジメント(株)、名古屋経済大学准教授、2016年から星城大学経営学部教授

■担当科目：商業論、文化継承論、流通論、中小企業経営論、観光まちづくり実践セミナー

■社会的活動：東海市コミュニティ連絡協議会研修委員、知多市商工振興課地域ブランド検討委員など各種委員会委員を務めている。

■主な著書・論文など

- 1) 傍嶋則之「ロードサイドビジネス研究」、単著、平成8年3月・滋賀総合研究所
- 2) 傍嶋則之「創る商う～地域活性化事例～」 単著 平成10年3月 滋賀県商工会連合会
- 3) 傍嶋則之「環境ビジネスレポート99」 単著 平成11年3月 滋賀県商工会連合会
- 4) 傍嶋則之「甲賀マエストロ創出事業」 単著 平成12年3月 滋賀県商工会連合会
- 5) 傍嶋則之「21世紀への挑戦『環境重視の町おこし事業』」 単著 平成14年3月 滋賀県商工会連合会

I 専門分野

保健体育科教育法、道德教育研究、教職論、教育課程論

II キーワード

保健体育科教育、道德教育、教育実習、教職、教育課程

III 研究テーマ

1. 学生の長所を生かし、個々の資質・能力を向上させる保健体育科教育の指導法
2. 実践的指導力の育成・豊かな人間性・資質を高める教職課程の在り方

IV 研究紹介

1. 新しい学習指導要領において、保健体育科の基本方針は、小学校、中学校、高等学校の12年間を見通した指導内容の体系化(1まとまり4年間)を図り、指導内容の確実な定着、体力の向上の重視、基礎的・基本的な知識・技能の習得に力点が置かれています。こうした新しい方針にも配慮しながら、生きる力の中の確かな学力を育むために、保健体育科の指導法は、運動の特性をより明確にし、指導計画及び指導法の工夫や学習活動に生きる評価の在り方が求められます。そこで、本学の保健体育科教育法の研究では、生徒一人一人を伸ばす指導のあり方に力点を置き、生徒の実態や課題意識を基に、生徒一人一人が課題に応じた練習方法や指導計画を立案できるような指導の在り方をきめ細かく追究したいと考えています。また、各運動種目に応じた学習形態の在り方や教材・教具の工夫など、より学校現場で生きる実践的な指導法の研究を進めていきます。
2. 学校の教育課程は、学校の共通の目標に向かって、児童生徒をよりよく成長させるための総合的な教育計画です。この学校運営の共通基盤となる教育課程の編成の在り方について、関係法令を基に、その編成の手順、工夫、評価などについて基礎的に学ぶとともに、中学校・高等学校現場の生の実践例を参考にしながら、特色ある学校づくりの在り方を追究していきます。より充実した教育課程の編成は、常に計画・実行・評価・改善のPDCAサイクルが有効に働き、生徒一人一人の自己実現が支援されているかにかかってきます。本学の研究では、このような生徒の立場に立った教育課程論を模索し、より実践的で学校現場で生きて働く研究に視点を置いて進めたいと考えています。

【参考】

- プロフィール：愛知県西尾市生まれ、愛知教育大学教育学部保健体育科卒業、愛知県教育委員会指導主事、文部教官教諭、西尾市立米津小学校長、西尾市立吉田小学校長を経て、2016年より星城大学教授
- 担当科目：保健体育科教育法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、道德教育研究、教職実践演習、教育実習、スポーツ実技Ⅰ(陸上)
- 社会的活動：愛知県中小学校体育連盟西尾支所理事・副支所長・支所長、西尾市小中学校長会副会長、一色町体育協会理事(学校代表)、愛知県中小学校体育連盟理事等を歴任
- 主な著書・論文など
 - ・「2001年の扉を開く」(明治図書) 1997年、共著
 - ・「文化創造」(黎明書房) 1999年、共著
 - ・「小中一貫(生活・総合)の学び」(黎明書房) 2005年、共著

I 専門分野

教育制度論、教育経営論、教育課程論、特別活動論

II キーワード

キャリア教育、グローバル人材、アクティブ・ラーニング

III 研究テーマ

- 1 教員の養成・採用・研修の在り方について
- 2 国際社会で活躍できる人材育成のための大学教育の在り方について

IV 研究紹介

- 1 平成 24 年 8 月の中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」の冒頭に、学校教育の現状と課題について次の記述があります。
「これからの学校は、基礎的・基本的な知識・技能の習得に加え、思考力・判断力・表現力等の育成や学習意欲の向上、多様な人間関係を結んでいく力の育成等を重視する必要がある。」「一方、いじめ・暴力行為・不登校への対応、特別支援教育の充実、ICTの活用など、諸課題への対応も必要となっている。」「これらを踏まえ、教育委員会と大学との連携・協働により、教職生活全体を通じて学び続ける教員を継続的に支援するための一体的な改革を行う必要がある。」本答申を踏まえ、さらに県立学校での校長・教頭・教諭としての経験、及び県教育委員会事務局での経験も生かしながら、本学の学生を、地域社会の期待に応えられる教員として送り出せるよう、養成の在り方について研究しています。
- 2 国際化・グローバル化が進んでいるといわれます。世界には多様な文化や思想があること、そしてそれらに理解と敬意を払えることが真の国際人であることをわきまえつつ、我が国の歴史や文化について誇りを持って語ることのできる若者を育てたいと考えます。あわせて、本学で学んだ人たちは、知多の様々な事柄に精通し、多くの人たちへ正しく伝えられるようであってほしいと願います。ここ知多は穏やかな気候のもと、多岐にわたる産業がバランス良く栄えてきました。さらに、江戸時代は海運業で繁栄しましたが、近年はセントレア開港により世界との距離が格段に近くなりました。このような状況の中、我が国、さらには知多に誇りを持てる学生をいかに育てるか、その方法を研究しています。

【参考】

■プロフィール：愛知県知多郡生まれ、半田市在住。早稲田大学教育学部理学科数学専修卒業。愛知県立高等学校教諭、愛知県教育サービスセンター教育主事、愛知県総合教育センター研究指導主事、愛知県立高等学校教頭を経て、愛知県立稲沢東高等学校長、愛知県立半田高等学校長。平成 27 年 4 月から現職。愛知県公立高等学校長会理事、愛知県公立普通科高等学校長会会長、愛知県産業教育振興会常任理事、愛知県高等学校体育連盟剣道専門部長などを歴任

■担当科目：教育制度論、教育経営論、教育課程論、特別活動論、教育実習など

■主な研究及び発表論文

いずれも愛知県公立普通科高等学校長会のグループ研究

研究のまとめは、各年度の会誌に掲載

- 平成 20 年度 「普通科高校の学習における初期指導の実態と課題」
平成 21 年度 「普通科高校における新学習指導要領移行に伴う諸課題」
平成 22 年度 「普通科高校における「生きる力」を支える確かな学力の育成」
平成 23 年度 「これからの普通科高校の在り方」
平成 24 年度 「普通科高校におけるキャリア教育の推進に向けて」
平成 25 年度 「普通科高校における魅力づくりとその発信」
平成 26 年度 「普通科高校における新教育課程の諸課題について」

I 専門分野

戦略経営、危機管理、技術経営、人的資源管理

II キーワード

危機管理、人と経営、プライド経営、大学経営

III 研究テーマ

1. 持続性を高める戦略的危機管理の枠組みのその実践原理
2. 組織経営の本質としてのプライド経営の実践、人と心の経営
3. 大学経営における戦略経営と危機管理

IV 研究紹介

1. 現代企業経営においてはただ一回の戦略的選択の失敗がただちに企業の存続をも左右する致命的な危機に繋がる。特に 21c に入ってから、世界規模の経済危機によって経営環境の不確実性がさらに高まっている。このような経営環境と企業経営に対する認識に基づき、組織の持続性を高める経営の枠組みと実践原理としての戦略的危機管理の実践原理に注目する。
2. 経営の主体は人間である。構成員の心を動かし、意欲を刺激し、最大限の力を発揮させる源泉になるのが、組織と仕事に対するプライド(自負)であり、それこそが経営の本質といえる。すべてが目先の経済的成果が優先視される本末転倒の経営の時代において、経営の本質としての構成員の自負に注目し、経営の目指すべき真の価値を探る。
3. 今大学経営は大きな転換点を迎えている。少子化に伴う経営環境の悪化に加え、入学者の基礎学習能力の低下に伴って大学教育の本質的な在り方に対する混乱が生じている。組織の経営戦略、危機管理の観点から今後の大学経営のあるべき姿と今の時代の大学教育の方向性を探る。今大学経営は大きな転換点を迎えている。

【参考】

■プロフィール：韓国ソウル出身、京都大学大学院経済学研究科博士後期課程修了、経済学博士(経営学専攻)、韓国ポスコ経営研究所経営戦略部門リーダー(研究委員)、DBM Korea 主席コンサルタント、韓国漢陽大学デジタル経営学部/産業大学院兼任教授、情報通信大学院非常勤講師を経て、2004 年から星城大学経営学部教授(現副学長)

■担当科目：経営戦略論、危機管理論、技術経営

■社会的活動：組織学会、経営学会、日本リスクマネジメント学会、日本労務学会、賃金学会、愛知人事問題研究会、日本地域資源開発経営学会、在日韓国人研究者フォーラムに所属。

■主な著書・論文など

- ・危機管理論序説、1995.4、「調査と研究」、第 8 号、京都大学
- ・『企業危機管理の実践原理』(韓国語版)、2001 年 4 月、芸元出版社(韓国)
- ・『経営戦略と組織間関係の構図』(共著)、第 13 章：戦略的危機管理、2005 年 3 月、中央経済社
- ・「大学危機の本質と対応」、2007.9、星城大学「研究紀要」第 4 号、星城大学
- ・「日本企業の創造性」(共著)、創造的組織創り・創造的組織革新の条件、2008 年 12 月、三恵社
- ・「日本の大災害から学ぶ危機管理の教訓」、2011.6、KOREA PR.review 第 57 号、韓国 PR 協会
- ・「経営における人の再考」、2016.2、愛知学院大学論叢「経営学研究」第 25 巻 1・2 合併号

I 専門分野

考古学、博物館学、遺跡・史跡の保存と活用

II キーワード

まちづくり、まちの魅力再発見、文化財

III 研究テーマ

1. 歴史的な文化財を活用したまちづくり

IV 研究紹介

1. 私は観光まちづくりコースのゼミナールを担当しています。考古学が専門ですので、長年にわたって遺跡や史跡の保存と活用について関心を持ち続けてきました。まちづくりに関しては、このところ、重要伝統的建造物群保存地区指定地域を見学すること、まちづくり株式会社の活動を調べること、などを行っています。
2. 個人的には、知多地域のマンボ（横井戸）の情報をあつめ農業土木遺産として保存することを目指しています。マンボとは、ため池に伴うトンネル状の導水路のことで、知多半島では江戸時代末から明治時代にかけて作られたようですが、ひょっとすると西アジアのカナート、中国のカレーズに起源があるかもしれない貴重な遺構です。マンボをまちおこしのための観光資源に出来るかもしれません。
3. 全国にはまちづくりにかかわっている大学がかなりあります。もと大阪人間科学大学の片寄俊秀先生を代表世話人とする全国まちづくりカレッジ(略して、まちカレ)の第18回の会合が、今年度は10月15・16日に名古屋学院大学で開催される予定です。こうした機会にできるだけ積極的に参加して、全国各地のまちづくり活動の情報を集め、星城大学の地元でのまちづくり活動に活かしていきたいと考えています。

【参考】

■プロフィール：愛知県春日井市在住、南山大学文学部卒業、南山大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学、1985年から（財）愛知県埋蔵文化財センター調査研究員、1993年から名古屋明德短期大学国際文化科専任講師、1997年同助教授、2003年から星城大学助教授、2008年から同教授

■担当科目：ゼミナール（観光まちづくり）、考古学、博物館学、観光学概論、総合ことば演習

■社会的活動：東海市文化財調査委員、春日井市文化財保護審議委員、愛知県史調査協力員、国士舘大学イラク古代文化研究所共同研究員、東海市都市計画審議会委員

■主な著書・論文など

- ・「野外考古学におけるデジタルカメラの活用についてーオラーン・オーシグ I 遺跡の発掘調査よりー」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』pp.345-360、伊藤秋男先生古希記念考古学論文集刊行会、2007年
- ・「知多半島のマンボ（1）」『研究報告 とうかい』創刊号、pp.81-89、東海市教育委員会、2007年
- ・「知多半島のマンボ（2）」『研究報告 とうかい』第2号、pp.50-53、東海市教育委員会、2009年
- ・「知多半島のマンボ（3）」『研究報告 とうかい』第3号、pp.24-31、東海市教育委員会、2011年
- ・「知多半島のマンボ（4）」『研究報告 とうかい』第4号、pp.45-50、東海市教育委員会、2013年
- ・「マンボのルーツを訪ねてーカレーズ博物館見学記ー」『研究報告 とうかい』第5号、pp.56-61、東海市教育委員会、2015年

I 専門分野

スポーツマネジメント、スポーツ社会学、スポーツビジネス

II 研究テーマ

1. 地域スポーツクラブの少子・高齢化社会に及ぼす影響に関する研究
2. 競技スポーツのチームマネジメントに関する研究

III 研究紹介

1. 現代社会において少子・高齢化が叫ばれていますが、「健康」というキーワードの下、様々な取り組みがなされています。この問題解決において、運動・スポーツの役割が非常に大きいと言われています。

現在、文部科学省が推進する「総合型地域スポーツクラブ」の存在が、今後の日本のスポーツ状況を大きく変えるのではないかと考えられており、それによって日本社会が抱える諸問題にどのような影響を与えるのかを考えていきます。

2. 私は、競技スポーツの指導者として対象を大学生に現場で指導を行っております。そこでは伝統大学とは違い新設の大学ということもあり、一からのスタートです。そのため、チーム立ち上げにむけての準備、新興勢力による周囲からの協力不足などチームを運営・管理する能力が問われます。本大学の状況を事例研究として、競技スポーツのチームマネジメントに関する研究活動を行っていきます。

【参考】

■プロフィール：愛知県名古屋市生まれ、中京大学体育学部卒業、中京大学大学院体育学研究科博士課程単位取得退学（体育学修士）、2004年から星城大学経営学部講師、2010年から准教授、2016年から教授

■担当科目：スポーツマネジメント論、生涯スポーツ論、体育・スポーツ社会学、コーチング論

■社会的活動：愛知大学野球連盟理事、日本体育学会、日本スポーツ社会学会

■主な著書・論文など

- ・「高校野球の持つ価値と問題性に関する一考察」1997年、『中京大学論叢』第38巻第2号、共著
- ・「生涯スポーツイベント参加者がもたらす大会参加総支出額の試算」1997年、『東海保健体育科学』第19巻 共著
- ・「生涯スポーツイベントにおける消費行動」1998年、『中京大学論叢』第39巻第2号、共著
- ・「大学生のスポーツ活動へのコミットメントに関する一考察」星城大学『研究紀要』第9号 単著

I 専門分野

経営学、組織論、企業文化論

II キーワード

国際経営、華人経済、大学の国際化

III 研究テーマ

1. 華人経済圏における日系企業の進出戦略と実務
2. 海外の高度教育研究機関による複合的・有機的連携関係に関する調査研究

IV 研究紹介

1. 華人経済圏（主に中国、台湾、香港、東南アジアなどの地域）における進出コンサルティング経験も持っているので、共同研究のみならず、関連する実地調査や FS (feasibility study) の作成、JV (Joint Venture) のファインディングや事業運営のアドバイスなどにも対応することができます。本学の国際ビジネスコース「国際ビジネス実践セミナー」にて、海外の第一線で活躍されている企業の経営者や管理者を招いて学生に実践的な講義を行って頂いているので、若者に国際経営の現実を語って頂ける方は是非ご一報下さい。
2. 2010 年 4 月に経済産業省と文部科学省は大学や企業が人材のグローバル化を進めて、国際的な日本の存在感向上に繋げるべきだとする提言をまとめた。社会問題の複雑化と多様化に伴って、知識基盤社会を多様に支える高度で知的な素養のある人材の育成に当たって、大学教育の現場においても国際的な連携や産学連携が重要なキーワードとなっている。本研究は前述の時代要請に応えるためのものだとして位置づけたく、海外の高度教育研究機関との複合的・有機的な展開の可能性を探り、従来型の 2 校間協定による交流とは異なる教育プログラムを行い、真のグローバルなネットワークの構築をはかりたい。将来的には、既存の提携校に加えて、総合的な連携によるコンソーシアム形式の交流や海外インターン、オンラインによる授業交換などを実現し、大学経営と学生教育の活性化にも繋がりたいと狙っている。

【参考】

■プロフィール：1958 年台湾・台北市生まれ。京都大学経済学部卒業、同大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。1991 年に三和総合研究所（現「三菱 UFJ Research & Consulting(株)」）金融戦略部研究員（正社員）として入社。同社の国際経営開発部、企業戦略室のシニアコンサルタントなどを経て、2002 年 4 月から星城大学経営学部教授。日本経営学会、組織学会、日本労務学会、日本台湾学会、中国経済経営学会の会員。

■担当科目：グローバルマネジメント、ベンチャービジネス論、中国経済事情、異文化理解演習、国際ビジネス実践セミナー、海外ビジネスセミナー、海外ビジネス演習、ゼミナール など。

■社会的活動：中国湖北大学商学院講座教授、中華民国行政院僑務委員会僑務促進委員、株式会社松本微生物研究所取締役（社外）、（台湾）留日大学教師聯誼会理事など。

■主な著書・論文など

- ・「環境保全と教育事業は今後も中国の有望なビジネス分野であり続ける」2009 年みずほ銀行『みずほ中国 法務・税務・労務ヘッドライン』No.3、単著。
- ・「日本の大学国際化と国際教育の発展趨勢」2008 年、台湾『東亞論壇季刊』No.462、単著。
- ・『労務管理と人的資源管理の構図』、2005 年、中央経済社、共著。
- ・「近年における日本企業の対中企業戦略の変化と動向」2005 年・星城大学経営学部『研究紀要』No.2、単著。
- ・「中国の私営企業とベンチャービジネス ―躍進する私営企業とその課題―」2004 年・全国日本学士会『アカデミア』No.86、単著。
- ・『活路を拓く台湾産業』2002 年、財団法人交流協会、共著 など。

I 専門分野

流体力学、計算理工学、空気調和工学

II キーワード

水や空気の流れ、気流シミュレーション、乱流、直接数値シミュレーション、Web、サーバーサイドプログラミング

III 研究テーマ

1. 一様等方性乱流場の統計理論
2. 授業研究 (大学教育における授業分析)

IV 研究紹介

1. たとえば、物品の貸出管理システムや、ネットワークカメラを利用した施設利用管理システムなど、ゼミの学生と Web で動作するアプリケーションを制作。
2. 授業研究。
3. 乱流場を数値シミュレーションで再現し、乱流の統計的性質を調べる。

【参考】

■プロフィール：東京都立大学理学部物理学科卒業、名古屋大学大学院工学研究科博士前期課程修了、名古屋大学博士（工学）取得。三菱電機株式会社（住環境システムエンジニアリングセンター、冷熱システム製作所）、星城大学経営学部助手・講師を経て、2011 年より星城大学経営学部准教授。

■担当科目：科学的思考、HP コンピューティング、エンドユーザーコンピューティング

■社会的活動：東海市ひとづくり協議会委員

■主な著書・論文など

- ・ Mohammad Reza Sarkar Arani, Takenobu Fukaya, Yoshiaki Shibata, Takaki Ishida ,” Changing University Concept of Learning: Lessons Learnt from a Lesson Study at Collegiate-level of Education ,” Proceedings of the WALS2011 (2011), Japan, November
- ・ T. Ishida , “Lesson Study as a Model of Improving Teaching: Focus on Collegiate-Level of Education ,” Proceedings of the WALS2010 (2010), Brunei, December
- ・ P. A. Davidson, T. Ishida and Y. Kaneda ,”Linear and Angular Momentum Invariants in Homogeneous Turbulence ,” Proceedings of the IUTAM Symposium on Computational and New Perspective in Turbulence(2008), Nagoya, Japan, September, pp11-14
- ・ T. Ishida and Y. Kaneda , “Small-scale anisotropy in magneto- hydrodynamic turbulence under a strong uniform magnetic field ,” Phys. Fluid 19 , 075104 (2007)

I 専門分野

言語、英語、キリスト教

II キーワード

英語、日本、市民性、徳性、宗教 (キリスト教)

III 研究テーマ

1. 日本を発信する英語
2. 市民性育成という視点からの英語教育

IV 研究紹介

1. 日本を発信する英語

グローバル化と共に、異文化に触れる機会も増えました。日本についてほとんど知識がない人達に、如何にすれば日本を理解してもらえるのでしょうか。しかも、百科事典的に日本的なるものについて英語で説明すればいい時代は終わり、複雑な事項について簡潔に、かつ、的確に論じなければならないのが 21 世紀の現在です。グローバル世界の中で英語を用いつつどのように自国の文化を発信するべきなのか、皆様とご一緒に考える機会があれば幸いです。

2. 市民性育成という視点からの英語教育

健全な意味での共同体意識は健全な心から生まれます。民主国家である日本においては、そのような心とは、高い徳性であると言えることができるでしょう。英語教育を通じて、生徒・学生諸君の徳性を高めることは可能です。具体的な方策はもちろん、精神的な次元に於いても教育に携わる皆様とご一緒に意見を分かち合いたいと思います。

【参考】

■プロフィール: 愛知県名古屋生まれ、南山大学外国語学部英米学科 (学士)、ターラム大学大学院 (修士)、ニューカッスル大学現代言語研究科専任講師 (日本語)、名古屋明德短期大学英語科助手・講師・助教授、星城大学経営学部助教授を経て、2007 年から星城大学経営学部准教授。2016 年より星城大学学長補佐兼国際センター長。

■担当科目: 英語Ⅲ・Ⅳ、総合英語Ⅰ・Ⅱ、英語討論、TOEICⅠ、TOEICⅡ、言語文化、自分づくりゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、社会探索ゼミ

■社会的活動: 東海市土地開発公社情報公開審査会会長、東海市公の施設の指定管理者選定委員会委員

■主な著書・論文など

- ・「血盟団事件、千年王国、キリスト教左派」星城大学『研究紀要 No.16』2016 年 (単著)
- ・「第二次世界大戦後日本基督教界を支配した歴史認識: その問題性—女たちの戦争と平和資料館の活動を手掛かりに—」星城大学『研究紀要 No.15』2015 年 (単著)
- ・「日本基督教界における政治活動偏重のもたらす問題性」星城大学『研究紀要 No.14』2014 年 (単著)
- ・「『キリスト教と天皇 (制)』—マニック・シグタリズムを手掛かりに—」『星城大学 人文研究論叢 Vol.7』2011 年 (単著)
- ・「座学以外の講義形式の可能性を求めて—星城大学経営学部『社会探索ゼミ』の試み」星城大学『研究紀要』No.14』2014 年 (共著)
- ・「日本を発信する英語」星城大学『研究紀要 No.13』2013 年 (単著) (論説資料保存会『英語学論説資料』第 47 号採録)
- ・「『TOEIC®テスト新公式問題集』Part3 の質的分析—徳性の視点から—」『星城大学 人文研究論叢 Vol.8』2012 年 (共著)
- ・「TOEIC®テスト問題集に見られる英語素材の分析—教養教育という視点から—」『星城大学 人文研究論叢 Vol.7』2011 年 (共著)

I 専門分野

英語教育

II キーワード

英語教育、教養教育、異文化理解、キリスト教

III 研究テーマ

1. 大学教養教育に合致した英語教材の開発
2. 英語素材に見られる宗教的背景の分析
3. アメリカの福音主義キリスト教

IV 研究紹介

1. 米国 The Christian Film and Television Commission および MOVIEGUIDE® 推奨作品に見られるような“アメリカの良心”ともいうべき倫理的個人主義を涵養する英語素材に注目しています。倫理的個人主義は、米国ではキリスト教およびキリスト教と並行して存在するアメリカ“市民宗教”の価値観と合致するものです。日本の“日本の良心”ともいうべき倫理的個人主義の存在に思いを馳せつつ取り組んでおります。
2. グローバル社会および広く民主国家において求められる市民性の育成という目的に合致した英語教育の在り方を模索しています。

【参考】

■プロフィール：愛知県東海市生まれ、南山大学外国語学部英米学科（学士）、南山大学外国語センター L.L. 教務助手、米国セント・マイケルズ大学大学院（TESL 修士）、名古屋明德短期大学英語科専任助手・講師・助教授、星城大学経営学部専任助教授を経て 2007 年から星城大学経営学部准教授。他に、1984-85 年国際ロータリー財団奨学生、1993 年ウィクリフ主催 SIL (Summer Institute of Linguistics) 夏期言語学講座異文化コミュニケーション・トレーニング受講（於東京羽村市東京聖書神学舎）、1995 年 ICI (Intercultural Communication Institute) 主催 SIIC (Summer Institute for Intercultural Communication) 夏期異文化コミュニケーション講座受講（於米国オレゴン州 Pacific University）など。

■担当科目：英語Ⅲ・Ⅳ、総合英語Ⅰ・Ⅱ、TOEICⅢ、自分づくりゼミⅠ・Ⅱ、社会探索ゼミ

■主な著書・論文など

- ・「座学以外の講義形式の可能性を求めて—星城大学経営学部『社会探索ゼミ』の試み」2013 年、『大学教育学会第 35 回大会要旨集録』所収、共著
- ・「『TOEIC® テスト新公式問題集』 Part 3 の質的分析—徳性の視点から—」2012 年、星城大学『人文研究論叢』第 8 号所収、共著
- ・「教養教育という視点から見た『TOEIC® テスト新公式問題集』」2010 年、『大学教育学会第 32 回大会発表要旨集録』所収、共著
- ・「星城大学におけるオリジナル英語教材作成および使用の試み—Hiplus for Campus を利用して」2005 年、『外国語メディア教育学会 (LET) 第 45 回全国研究大会・総会発表要項』所収、共著
- ・「日本人短大生と『家庭』の果たす役割～異文化ホームステイ・プログラムが提示する教育的課題」2001 年、名古屋明德短期大学『紀要』第 16 号所収、単著

I 専門分野

経営情報学、経営工学、社会システム工学、教育工学

II キーワード

システムシミュレーション、オペレーションズリサーチ、情報システム、ビッグデータ、オープンデータ、シリアスゲーム、ゲーミフィケーション、ソーシャルネットワーク、情報モラル

III 研究テーマ

3. 環境配慮型生産システムの設計とシミュレーション分析
4. 反転授業の教材としてのシリアスゲームの最適選択に関する研究

IV 研究紹介

1. 近年、環境やエネルギーに関して、深刻な問題が顕在化している。生産活動を含む経済活動の結果として環境・エネルギー問題が引き起こされていると考えられ、喫緊の取組みが不可欠である。特に、生産活動を中心とする製品ライフサイクルの全体を考慮し、環境配慮型の生産システム、言い換えればサプライチェーンを構築する必要がある。本研究では、環境配慮型の生産システムを設計し、シミュレーション言語を用いてシステムをモデリングした上で、シミュレーション分析を実施することにより、設計したシステムのパフォーマンスを評価・検証する。
2. 大学における経営学教育では、実践的な教育手法としてビジネスゲームの活用が進んでいる。一方で、シリアスゲームと呼ばれるデジタルゲームを用いた教育方法が広がりつつある。シリアスゲームには、教育用に開発されたゲームだけでなく、娯楽目的で開発されたゲーム、いわゆるコンシューマゲームを教育目的として利用する場合も含まれる。経営学教育にコンシューマゲームを用いる際、正確な経営分析に必要な数値が直接得られるとは限らないという短所が存在するが、他方で授業時間外に学生が自ら設定した経営学上の課題を追求するために、積極的にゲームプレイを行うことができるという長所もある。本研究では、ビジネスゲームやシミュレーションゲーミング研究の知見および実際の授業における学生からのフィードバックを手掛かりに、教育手法の一つである反転学習により経営学教育を行うための教材として相応しいデジタルゲームを選択する際のガイドラインを提示することを目的とする。

【参考】

- プロフィール：名古屋大学経済学部卒業、名古屋大学大学院経済学研究科博士課程（後期課程）修了、博士（経済学）取得。同大研究員（2006年4月）、星城大学経営学部講師（2006年10月）を経て、2011年4月から星城大学経営学部准教授。星城大学地域センター副センター長。2016年4月から星城大学元気創造研究センター長。
- 担当科目：情報システム論、インターネット基礎論、生産システム論、ロジスティクス、シリアスゲーム演習 等
- 社会的活動：日本情報経営学会 組織委員会幹事、日本経営システム学会 評議員、日本ロジスティクスシステム学会 理事、東海市産業育成会議 議長、東海市次世代産業審査会 委員 等
- 主な著書・論文など
 - ・『Simio とシミュレーションーモデリング・解析・応用（第3版）』2015年、Createspace、翻訳
 - ・「フィジカルコンピューティングとパーソナルファブ리케이션によるプロジェクト型学習の実践」2016年、『星城大学研究紀要』Vol.16、pp.1-12、単著
 - ・「飼料価格の変動を考慮した産卵鶏群の最適配置」2015年、第54回日本経営システム学会全国研究発表大会

（その他の業績は大学 Web サイトの教員紹介ページに掲載）

I 専門分野

マルチメディア論(景観論)、都市計画学(都市交通論)、都市・生活情報論

II キーワード

景観、都市情報、都市交通(、空地・空家)

III 研究テーマ

1. 地域 IC カード(無線 LAN から RFID まで)
2. コミュニティバス(道路網、公共交通網の計画)
3. 都市計画学(景観論・都市交通論)

IV 研究紹介

1. IC カードって、ご存知でしょうか? 近年、電子マネーとしてよく使われます。これを、地域カードとして使えないか、研究しています。もともとは、この大学の学生証としても、用いられたのですが、もうすぐ鉄道会社が新しいカードを出すと聞いています。一昨年度より、研究会を開いています。東海まちづくり研究会の兄弟分のような存在です。

私は、地域カードとして知多半島全域で非接触 IC カードによる、地域カードの実現を夢見ています。小銭の要らない、お年寄りにも優しいカード社会は、どんなものでしょうか。

2. コミュニティバスは、福祉のバスか? ワンコインのバスが最近たくさん見られます。多くは、路線バスより小さな車体で細い道に入ったりするので、一度乗るとなかなか便利なバスです。しかし、乗りたいときに来てくれず、また遠回りをします。時間に余裕のないときには乗れません。

私は、路線も大事ですが、公共交通には頻度もある程度必要ではないかと思います。そのためには、幹線公共交通との乗り継ぎが必要であると思います。

3. 全世界的に見て、自動車に乗れるくらい経済的に豊かな人が増えてきました。なんとか、燃料の奪い合いをせずに、暮らせないかと考えています。ソーラー発電、グリッド情報など。
4. 最近、空地・空家について調べだしました。これから殖えるであろう、これらについても情報をお願いします。

【参考】

■プロフィール: 京都市生まれ、京都大学工学部土木工学科卒業、京都大学大学院工学研究科修士課程修了(工学修士)、岡山大学工学部助手、岐阜聖徳学園大学助教授、2002 年から星城大学経営学部准教授

■担当科目: マルチメディア情報論、経営科学、都市情報論、生活情報論、都市計画論、都市交通論

■社会的活動: 東海市都市計画マスタープラン委員、岐阜市長良川フォーラム、日本交通政策研究会低炭素社会の交通運用研究グループ研究員

■主な著書・論文など

- ・『すぐわかる計画数学』1998 年、コロナ社、共著
- ・ユビキタス環境の街づくり 2003 年、オフィスオートメーション学会誌 単著
- ・はんだの祭と岸和田だんじり祭の比較 2009 年、星城大学経営学部『研究紀要』第 8 号所収、単著
- ・知多地域における地域 IC カード 2010 年、情報経営学会 単著

I 専門分野

日本語教育学

II キーワード

日本語教育、言語学習観、異文化コミュニケーション、外国人留学生の就職支援

III 研究テーマ

1. 多文化共生を目指した日本語教育支援
2. 外国人留学生への就職支援のあり方

IV 研究紹介

1. 1990 年の「出入国管理及び難民認定法」改正以来、知多半島にも就労を目的とした外国人が増加しました。また、彼らの定住に伴い、日本語教育が必要となる外国人子弟の数も増加しています。外国人にとっては、異文化環境である日本での教育・就労はわからないことが多く、困難を抱えていることが予想されます。また、地域のボランティア日本語教室など支援する側にも、異文化理解やコミュニケーションに困難を抱えていることもあるでしょう。

多文化共生を目指し、日本語教育に関わるニーズの分析とそれにいかに対応していくか、また、異文化とどう向き合い、どのように折り合いをつけるかを、地域の皆様とともに考えていきたいと思っています。

2. 日本における外国人留学生の就職率（「留学」から就労可能な在留資格に変更した数値）は、2005 年以降、修了生・卒業生に対し 20～30%で推移しています。政府の「留学生 30 万人計画」の下、来日する留学生数が増加するのに伴い、日本での就職を目指す留学生数も増加しています。一方、教育現場における留学生に対する就職支援はなかなか進んでいないといえます。日本人学生と留学生では、就職活動として行う活動は共通していますが、留学生に対する求人情報数、留学生特有のキャリア志向、在留資格変更申請など、異なる点があります。それらを踏まえ、留学生に対する就職支援のあり方を検討し、教育現場に提示することを目指しています。

【参考】

■プロフィール：愛知県半田市生まれ、名古屋商科大学商学部国際経済学科卒業（国際経済学士）、名古屋外国語大学大学院国際コミュニケーション研究科 博士後期課程 日本語学・日本語教育学 単位取得満期退学（日本語教育学修士）、ベトナム国家大学貿易大学（ハノイ）日本語教師、韓国国立順天大学校人文社会科学大学東洋語文学部日本語日本文学科 客員教授（日本語）、名古屋外国語大学非常勤講師などを経て、2014 年 9 月より星城大学経営学部 講師。学生相談室相談員、ハラスメント相談窓口担当。

- ・一般社団法人日本産業カウンセラー協会認定産業カウンセラー、キャリアコンサルタント
- ・キャリアコンサルタント（国家資格）

■担当科目：日本語 I・II、日本語スピーチ、日本語論文、総合ことば演習 I～IV、異文化コミュニケーション、キャリアサポート III

■社会的活動：日本語教育学会、社会言語科学会、留学生教育学会、異文化コミュニケーション学会 所属、一般社団法人日本産業カウンセラー協会 資格登録会員

■主な著書・論文など

- ・『「基礎ゼミ」の授業効果測定—平成 19 年度のプリ・ポストテストの結果から—』『大学における基礎教育プログラム 研究論集 第 4 号』(2008)名古屋外国語大学 外国語学部 基礎ゼミ委員会 pp.22-37 (共著)
- ・『「基礎ゼミ」を通して学んだこと』『大学における基礎教育プログラム 研究論集 最終 第 10 号』(2014)名古屋外国語大学 外国語学部 基礎教育プログラム委員会 pp.7-9

I 専門分野

現代中国語文法、中国語教育、言語学

II キーワード

中国語研究、中国語教育

III 研究テーマ

1. 現代中国語における再帰表現に関する研究
2. 現代中国語における身体部位名詞の意味拡張について（認知言語学的アプローチから）

IV 研究紹介

1. 民間では、地域のカルチャーセンター等で中国語講座が開講されています。しかしながら、幅広い年齢層や中国語学習の経験により、習得レベルに差があるといったように、経歴の異なる方々が同時に受講しているケースが多々見られ、授業をスムーズに行えないといった問題が発生しています。

このような問題を解決するには、クラスレベルの細分化、少人数制クラスの設置、それに伴う講師の増加などが必要であると考えられます。そこで、地域との連携により、公共施設を利用した複数の教室開講、地域と密着した講師の確保や地域の方々と講師との協力に基づいた教室運営といった方法が挙げられます。

また、中国語や中国文化に興味をもつ人達が協力し合うことにより、イベント等の企画開催も行うことができ、更なる地域活性化が期待できると思われます。

中国語講座の開講や運営に関してご相談がある際には、どうぞお気軽にご連絡ください。

【参考】

■プロフィール：三重県いなべ市生まれ、名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士後期課程修了、2009年から星城大学経営学部講師

■担当科目：中国語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、自分づくりゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、社会探索ゼミ、中国経済事情

■社会的活動：日本中国語学会会員、中国語教育学会会員、日中対照言語学会会員、日本言語学会

■主な著書・論文など

- ・“试论“头”的基本义和语义扩展”（訳：「“頭”の基本義とその意味拡張について」）2005年、名古屋大学大学院国際言語文化研究科国際多元文化専攻『多元文化』第5号所収、単著
- ・「現代中国語における再帰表現に関する一考察——「V+身体部位 N」の形式を中心に」2008年、名古屋大学大学院国際言語文化研究科国際多元文化専攻『多元文化』第8号所収、単著
- ・「中国語の再帰表現における他動性と客体化の関連性——「V+身体部位 N」の形式を中心に」2008年、『星城大学人文研究論叢』第4号所収、単著
- ・「現代中国語における“被”構文と主題文について——「V+身体部位 N」形式の再帰表現を中心に」2009年、『星城大学人文研究論叢』第5号所収、単著
- ・「現代中国語の再帰表現における受身文への適性に関する一考察——「身体部位 N+被+Na+VP」形式を中心に」2010年、『星城大学人文研究論叢』第6号所収、単著
- ・「現代中国語の再帰表現における自然受身文への適性に関する一考察——「身体部位 N+VP」形式を中心に」2011年、『星城大学人文研究論叢』第7号所収、単著

I 専門分野

地域社会学

II キーワード

観光まちづくり、郷土芸能、神楽、山車まつり、中山間地域

III 研究テーマ

1. 郷土芸能（神楽、山車祭り）による観光まちづくり
2. 中山間地域の生活様式と地域経営

IV 研究紹介

1. 広島県の北西部で盛んな神楽を事例に現代地方都市における祭り・郷土芸能（神楽）の文化変容や機能に関する研究を行ってきました。赴任したばかりで土地勘がほとんどありませんが、今後は知多半島を舞台にまちづくりにおける祭りや郷土芸能の活用方法（ひとづくり、組織づくり、観光振興、社会関係資本の醸成等）に着目した研究に取り組んでいきたいと考えています。
2. 中山間地域を中心に過疎化が進行し、限界集落という言葉も定着してきました。日本全体で人口が減少する中、農山村集落にとって望ましい方向は何か。集落の「再生」に取り組むのか、「移転」するのか、「むら納め」するのか、など地域経営のあり方について勉強中です。

【参考】

- プロフィール：広島県広島市生まれ、国立木浦大学校自治福祉行政協働課程修了、2016年より星城大学講師
- 担当科目：まちづくり論、社会探索ゼミ、自分づくりゼミⅠ・Ⅱ、ゼミナールⅠ・Ⅱ、文化継承論、観光まちづくり実践セミナー
- 社会的活動：日本地域資源開発経営学会 理事（総務）、NPO 広島神楽芸術研究所 理事、NPO 日韓（韓国）農業・農村文化研究所 副理事長など
- 主な著書・論文など
 - ・「中山間地域における郷土芸能の伝承活動と観光資源化ー広島県北広島町の神楽団へのヒアリングからー」2015年、広島修大論集、56巻1号、pp95-105、単著
 - ・「郷土芸能による地域振興とその課題-広島県北広島町の神楽団実態調査から-」2014年、広島修大論集、55巻1号、pp91-104、単著
 - ・『「広島神楽」の伝承過程と興隆に関する社会学的研究』2012年、広島修大論集、53巻1号、pp265-279、単著

I 専門分野

運動生理学、水泳

II キーワード

骨代謝、メカニカルストレス、骨形成

III 研究テーマ

1. 骨を鍛える
2. 低カルシウム摂取と骨強度
3. 小学校体育授業のサポートシステムに関する研究

IV 研究紹介

1. 骨は、運動による負荷が加わった部位にカルシウムを沈着させ、骨密度を増加させる事が知られている。これまで、ラットのジャンプトレーニングにより、特に脛骨の骨肥大に大きく影響をおよぼす事を報告してきた。また、運動強度は強い方が、より顕著な効果を得る事ができる。また、ジャンプの回数は10回程度でよく、それ以上の回数はより良い結果が得られるものの対数曲線に近似する結果となる。また、低強度の運動ではジャンプの回数を増加させる事で骨強度が高くなる結果が得られ、ジャンプの回数と強度の相互関係が示された。
2. さらに、ラットに低カルシウム食を摂取させながらジャンプトレーニングを行わせた結果、運動群の下肢骨骨密度が顕著に増加した。この不足分のカルシウムをどこから得られたのか検討した結果、臀部の骨密度が顕著に低下していることから、臀部の骨から下肢骨へとカルシウムの置換が行われた可能性を示唆した。
3. 近年、子どもの体力低下が非常に大きな問題となっており、身体を操作する能力、生活習慣病の危険性の高まり、仲間（意識）の減少（低下）および学力レベルの低下にまで影響があるとされている。本研究では、体育・スポーツ学を専攻している大学生を小学校に派遣し、毎朝行う運動介入および体育授業における模範演技や活動補助、活気あふれる授業づくりの一端を担う、小学生の体力向上に向けたサポートシステムを作成する事を目的とする。

【参考】

■プロフィール：兵庫県神戸市出身、中京大学体育学部卒業、中京大学大学院体育学研究科博士後期課程中退（体育学修士）、中京大学大学院体育学研究科助手、中京大学体育学部健康科学科講師、2012年より星城大学講師

■担当科目：運動・スポーツ生理学、体育実技（水泳）、スポーツ栄養学、レクリエーション実技

■社会的活動：東海シティマラソン実行委員、みよし市体育協会スポーツ指導者講習会講師、地域住民のための健康づくり運動教室

■主な著書・論文など

- ・“Effects of low-repetition jump exercise on osteogenic response in rats.” *J Bone Miner Metab* 26(3), 2008, 共著
- ・“Bones benefits gained by jump training are preserved after detraining in young and adult rats.” *J Appl Physiol* 105(3), 2008, 共著
- ・“High-impact exercise frequency per week or day for osteogenic response in rats.” *J bone Miner Metab* 26(5), 2008, 共著
- ・“Non-uniform decay in jumping exercise-induced bone gains following 12 and 24 weeks of cessation of exercise in rats.” *J Physiol Sci* 61(6), 2011, 共著
- ・“A few separated jump training sessions three times per week increase bone strength in rats.” *Adv Exerc Sports Physiol* 16(3), 2011, 共著

I 専門分野

組織行動論、人的資源管理論

II キーワード

人材育成、組織文化、組織社会化、経営理念

III 研究テーマ

1. 組織内・組織間の移動にともなう異なる環境に接触する個人の支援と育成
2. 日本企業の経営理念等価値観の海外現地人材との共有

IV 研究紹介

1. 組織内・組織間の移動にともなう異なる環境に接触する個人の支援と育成
入社、人事異動、転職など、組織内あるいは組織間の移動を経験する個人は、その移動前後における環境、業務の進め方、ルール（時には暗黙のルール）などの相違に驚きや戸惑いを生じることが多々あります。そのような現象に対して、移動する個人はどのように心構え、対応していくことができるのか。あるいは受け入れる組織や職場がどのように支援し、育成していくことができるのかを研究しています。
2. 日本企業の経営理念等価値観の海外現地人材との共有
グローバル化のなかで、企業の海外進出にともなう現地人材の育成が重要視されています。現地マネジメントのリーダー、自社のことを現地市場に広く伝える大使等になってもらうべく、現地人材を育成・支援していくことはとても重要だと思われます。そこで、日本における経営活動のなかでその組織が大切にしてきた経営理念やサービス精神等の価値観をいかに現地人材と共有していくことができるのか。どのようにすれば現地人材が所有する多様な価値観と、企業の大切にしている価値観とをポジティブに統合してもらうことができるのか、そのようなマネジメントを研究しています。

【参考】

■プロフィール：鹿児島市生まれ、一橋大学商学部卒業、神戸大学大学院博士前期課程修了（経営学修士）、2014年より星城大学講師

■担当科目：人材開発論、人的資源管理論、リーダーシップ論、モチベーション論

■主な著書・論文など

- ・「経営理念に対して差異化する意味の調整を図るマネジメントの探究—資生堂社・美容部門の中国事業における事例から—」2013年、『組織学会ドクトラル・コンソーシアム査読付報告論文』、単著
- ・「新卒採用者と中途採用者の組織社会化と革新行動—組織内・組織間移動に着眼した実証分析—」2013年、『神戸大学大学院経営学研究科ディスカッションペーパー』2013-20、共著
- ・「組織行動論におけるレジリエンス研究のタクソノミーと研究展望」(近刊)

星城大学 研究シーズ集

2009 年 11 月 初版

2016 年 9 月 改訂第 12 版

編集・発行：星城大学 地域センター

連絡先：

〒476-8588 愛知県東海市富貴ノ台 2-172

星城大学 地域センター

Tel : 052-601-6000 (代表)

e-mail : koryu@seijoh-u.ac.jp